

おさわに思ひを寄せてゐた清太郎が、まるで氣違ひのやうにわめき立て、ツルハシを投げつけた熊次へ向つて、

「土方の法律てえのは、何の罪もねえ人までぶつころすことか。さういふものか」と、吠え立てた。そして、おさわのからだを抱き上げ、泣くやうな聲でおさわを呼んだ。それから醫者を迎へるために、わた／＼と村の方へ走つて行つた。

醫者が来た時小頭も来た。清太郎は、小頭を拜むやうにして、おさわのことを頼み、熊次のことを訴へた。小頭は、熊次に就ての訴へは合點々々して聞いてゐたが、おさわのことをくど／＼と頼まれると、

「もう解つたよ、この青二才。これから貴様なんぞ、この女に指一本さはつたら承知しねえぞ」清太郎は呆氣に取られ、もう泣き出しさうになつた。小頭とおさわの關係を一つも知らずに、さうして騒ぎ立てゝゐる清太郎の姿は自分には見てゐられなかつた。

やがておさわのからだは擔架で運び去られた。清太郎が擔架の一方を擔がうとしたが、小頭は

それもさせなかつた。

ところでその翌日の午後のことだ。おれ達はいつもの通り、砂利を切りくづしてはトロに積んで、ごろ／＼と押してゐたが（この日にはもう犬の高島の姿は見えなかつた）一つの山裾から次の山裾へ移る所に十丁ばかりの可なりの勾配があつた。右は四五丈の岩が切り立ち、左手は三丈あまりの斷崖であつた。こゝを押し上げる時は、だれも渾身の力を肩へ集めて、一步／＼と押し上げる。前を見ることもうしろをふり返ることも出来ない。

自分のうしろからは例の犬退治の發起人で、あのおさわに重傷を負はせた熊次の奴が、息をフウ／＼吐きながらやつて來たが、丁度坂の七分ほど登つた所で、ぐわたん、ぐわらん／＼といふ物凄い物音がうしろで起つた。が、自分はそれを見るために振り返るわけには行かなかつた。自分は夢中でトロを押し上げた。やつと坂の上まで押し上げトロにブレーキを掛けてふり返つて見ると、熊次のトロも熊次の姿も見えない。左手の斷崖を見下すと、谷底の藪の中に、腹を見せたトロの一部が見えた。

が、これと同時に、自分の目に焼きつくやうに映つたものがあつた。それは、その斷崖の上のトロ線の中に、例の赤つ鼻を光らして、突つ立つてゐる小頭の姿であつた。殺氣立つたけもの

兩腕を差し延べて

やうな目であつた。

小頭は、自分がふり返つてゐるのを見ると、鞭を鳴らすやうな聲で叫んだ。

「馬鹿！ 行け！」

それから熊次の死體はどう始末されたか？ その夕方である。熊次は、法被姿のまま、線路の土手のコンクリート管の中へ、きれいに始末されてしまつたのだ。

もう一人の發起人である豊造は、身に迫る危険を感じ、この間に何處かへ飛んでしまつた。

その夜、小頭は、現場を目撃した自分の手へいつもの日當より五十錢だけ多い金を握らせて、自分の肩をボンと叩いてニタリと笑つた。

一人の小頭に對してさへ團結する力も意志も持たぬわれ／＼土工達に與へられた、この慘憺たるそして滑稽な結末！

四

だが自分は、これよりもつと簡單明瞭な事件——われ／＼の小頭のふるまひに就て書かずにはゐられない。

それは、それから更らに三月後の中國のある山地のトンネル工事中の出来ごとだ。自分は九州のあの鐵道工事を去るとき、二度と土工にはなるまいと決心して、この中國まで渡つて來たのであつたが、またもトンネル工事の土工となつてしまつたのだ。

こゝは、人里から三四里離れた山又山の奥だつた。で谷あひに一つの小屋を造り、そこにわれ／＼七十人あまりの土工が押し込められてこき使はれることになつた。

こゝにも百姓出の若者が混つてゐた。彼等は、われ／＼土工で叩き上げたものより十錢安の日當で一圓二十錢づつ貰つてゐたが、食費、夜具損料、工具損料、など差し引かれると、手に残るものはいくらでもなかつた。結局、生きてゐるだけのものであつた。

が、彼等にとつて更らに辛いことは、朝、東が白むと同時に叩き起されて、夕方は眞暗になるまで酷使されるその勞働であつた。

彼等は、夜になつて小屋にかへると、手を取り合つて忍び泣いた。初夏の蟲が鳴き出す頃で、何といふ蟲か、地の中で、チー………と鳴いてゐるのを聞いて、ある若い男は聲をあげて泣き出しさへした。

それは七月始めのことであつた。われ／＼は十六人が一組となつて、ある山合を幅員四間に開

兩腕を差し延べて

撃する工事を渡された。

この十六人の中には、七人の百姓の若者が混つてゐた。で、この連中は樂な仕事に廻すことにした。即ち、土工で叩き上げた八人が、兩側の岩の上に乗つた。そして鐵槌と鐵矢とツルハシで岩を叩き割る仕事をした。百姓の若者たちは、その下にゐて、上から落ちて来る岩を、更らに細かく割り、それをゴロタと一緒に電氣トロに積む仕事をした。自分一人は高架線で山の麓の砂利置場まで運んで行く電氣トロの鐵鍵のとりつけ役をしてゐた。

仕事は調子よく進んで行つた。高い所の岩が一つ割られる毎に、その岩と破片とは大きな音を立て、崩れ落ちて來た。砂ほこりがもん／＼とあたりに舞ひ上つた。下の若者達はその中へく／＼つて行つて、落ちて來た石を割りにかゝつた。

さて、その工事にかゝつて七八日したある日の夕方近くだ。岩の上で働らいてゐる土工達が、一本の鐵矢を岩石へ突き差し、その頭に第一の鐵槌を下した時であつた。その岩石の層が柔らかだつたのと、自然に内部にひびが入つてゐたためであらう。第二の鐵槌を食はせようとした刹那、その岩石を中心に、十坪ほどの土と岩石とが、すさまじい音響と共に崩れ出したのだ。そこに生へてゐた雜木と一緒に。

その下に石を割つてゐた若者達は、あつと叫ぶ間もなかつた。崩れて來た岩石と土砂と雜木は一つの大きな瀧となつて彼等七人の上へのし掛つて行つた。と見る間に、七人のからだは完全に埋められてしまつた。餘震のやうにその後からひつきりなしに崩れ落ちる砂礫が更らにその周囲へ砂塵の飛沫を立てた。いつの間にか上に働らいてゐた土工の二人も迂り落ちて、一人は右手を折り、一人は耳をけずり落された。

無事に生き残つた自分と、岩の上の六人の土工は、しばし放心したやうにその場に突つ立つてゐた。驚きの聲も出せなかつたのである。

小頭が飛んで來た。猫背の脚の長い四五六の男である。彼はこの慘狀を見ると、いやに落ちつき拂つて、生き残つたわれ／＼九人がその周圍に集るのを待ち、それから言つた。ツルハシで叩き込むやうな強い聲で、

「いゝか、君等、絶対だぞ。絶対だぞ！」

若し半句でもその絶対の意味を口外したなら、その場で叩き殺してやる、といふ調子である。そしてこれはまた決して嘘ではなかつた。

間もなく、恒といふ小頭の腹心の兒分が、工事本部へ走つた。

兩腕を差し延べて

その夜われ／＼は——腕を折つた男と、耳をそがれた男だけは小屋へ歸つたが——カンテラの黄ろい光りを頼りに、七つの死骸を掘り出した。血と肉と砂とで味噌のやうになつた頭が出た。泥草鞋のやうに平べつたくなつた胴體が出た。胸の中に砂礫を一ぱい詰め込んで、彼はそれを喰ひ過ぎて死んだと思はれるやうなものも出て來た。

掘出し終つた時は、夜中の二時過ぎであつた。それから、その七つの死骸はどうなつたか。七つの死骸は二つのトロに分け載せられて、一番近くの××××の中へ持ち込まれた。そしてまるで枕木を敷き並べるかのやうに、二三間置きに、××××下の土の中へ敷き並べられてしまつたのである。

これらの仕事の間、口をきくものは一人もなかつた。誰か一言でも聲を出すと、みんなはゾツとして身をすくめた。死骸が急に呻り出したやうな氣がするからであつた。

仕事が終わつたときは、みんな油汗を流しながらへと／＼になつてゐた。

夜が明けた。われ／＼は、松田組の大親分の前へ連れて行かれた。そしてその大親分から改めて禮を言はれた。次に、さかづきが廻された。われ／＼はこゝで、この大親分直屬の兒分にされてしまつたのである。

親分兒分のさかづきは、かういふ場合にも應用されることを自分はこゝで始めて目のあたり見たのである。

自分は、この後で、仲間の一人へ言つた。

「あの若者達の親元の方はどうするんだ？」

「そんなこと、手めえらの心配することぢやねえ」

相手は、自分を蹴とばすやうに答へた。それからしばらくして、かう言つた。

「全くうまく行きやがつたよ。あれで、あの仲間の一人でも××××つたら厄介だつたんだが」
が、つゞいてまた、かう一人ごとのやうに言つた。

「もつともその時ア、早いとこ×つけちやふだらうが」

五

その夜自分は一人、この山の小屋を脱走したのである。九州の鐵道線工事の時、あの土工の熊次が、小頭のために谷底へつき落された事件當時は、自分は腹の底から義憤し、命をかけてもさういふ敵と闘はねばならぬと感じたのであつたが、今この七人の埋没事件にぶつかつた自分は、

兩腕を差し延べて

その義憤も關心も、頭から踏みにじられてしまつたのだ。

だが、一方踏みにじられるほどその義憤と關心は燃えて来て、自分一人でも、あの小頭や大親分の咽喉笛を嚙み切つてやらすにはゐられない気持ちにもなつたが、しかし、自分一人できういふことを企てたところで、それは蟻螂のかまだ、立ちどころに、ぐしやりと毛虫のやうに踏みつぶされるばかりだ、と思ふと——結局自分は一人、この大親分から脱け出すより外はなかつたのである。

さて自分はこゝを脱走したはしたが、何處へ行つてどう自分を生かしたらいいか！

自分は正直に書く。自分はつひに××の仲間入りをしたのである。が、さうなる前に少し書くことがある。

山を脱走した自分は先づ神戸へ来た。それから大阪へ出た。更らに名古屋へ来た。さうしてつひに東京へ辿りついた。が、この時は一九三〇年の後半期に入つてゐて、われ／＼ルンペンに與へられる仕事は絶對になかつたのである。

それでも自分は何かの仕事にありつくために、労働手帳を手に入れようとした。が、三ヶ月以上東京に在住しない者には、労働手帳は下附されないのであつた。ブローカーから買ひ取らうと

すると、五圓以上でなければ賣らないと言ふ。自分は、濱園町のおかんキャンプに寝起きしてゐる始末で、五圓はおろか、五十錢玉一つ持つてゐなかつたのだ。

自分は幾度か飢ゑようとした。それを、芥箱の中の残飯を漁り食ふことに依つて辛うじて生きてゐた。

だが一九三一年になつてかういふ生き方も不可能となつた。無数の失業者から無限に轉落して来るルンペン群のために、一つの芥箱を四五人で圍んで、そこに命がけの争奪戦が行はれるやうになつたからである。

つひに自分は、東京の地も脱け出さねばならなくなつた。そして今から約一ト月前、寒風に背中を吹かれながら、またも西へ西へと、東海道を下り出したのである。

第一夜は、川崎の海岸の、ある酒屋の物置きの中へ寝た。

第二夜は、藤澤遊行寺のキャンプへ泊つた。こゝでは三十五六人の仲間と一緒にだつた。このうち二十人までは皆二十歳臺の屈強な若者であつた。さうして彼等もまた自分と同じやうに何處へ行く當てもなく、毎日の旅をつゞけてゐるのであつた。下關の下水工事の人夫達は、俺達はどうかすればいゝのだと言つて、恨みもないもの同志が命のやり取りをやつたが、こゝで出會つた彼等

兩腕を差し延べて

はそんなことをするほどの意力も體力もなかった。

李と呼ぶ朝鮮人が一人ゐたが、彼は、自分の腕へしがみついて、

「どうにかしてくれ」と言つて泣き出した。

翌日自分は、この李をつれて、更らに西へ歩き出したのである。

その翌日、遊行寺を發つて二日目の夕方、自分と李とは、飢ゑのために、道端へ倒れてしまつた。國府津の少し手前の松並木の下であつた。その二日間、二人は、ある百姓家で貰つた、たつた五本のふかし芋を分けて食つたきりだつたのである。

「うり、(俺の意味)首をくゝつて死ぬ」

李はさう言ひ出した。

自分はそれを跳ね除けるやうに言つた。

「馬鹿。これで死んで堪るか!」

その夜の十二時近くである。自分は李を従へて、ある山裾にある大きな薬屋根の百姓家の縁の下へもぐり込んだ。

二三十分ほど容子を窺つてから土間へ匍ひ出した。裏戸の横手の引き窓から入つて来る月明り

で臺所へ匍ひ上り、そこにあつたお鉢の蓋を取つた。が、中にはめしつぶもひつついてゐない。

また土間へ下りた。かまどの上の釜の蓋を取つて見た。意外にもそこには、むぎめしが二人の腹には充分なほど入つてゐた。

二人は、猿のやうに手を突つ込んで、むさぼり食つた。食つてゐるうちに、水氣がほしくなつた。

「おい、飲みものを探して来いよ」

李の耳へさう囁くと、李は、

「ぢや、それまでおめえも喰ふのを止めとけよ」と言つて、臺所の方へ行つた。

やがて李は、一つの汁鍋を持つて來た。これは理想的な飲みものである、二人は一本のしやもじを代るくゝに持つて、冷たい汁を夢中ですゝつた。が、しまひに李の奴、手でしゃくつて飲み出した。自分も負けず、鍋を両手に持つて、大盃をあほるやうにして飲んだ。

腹が一ぱいになると、もう何の慾もなかつた。で、すぐに縁の下から外へ脱け出した。往來まですて、月の下で互ひに顔を見合はしたとき、二人は譯もなく笑ひ出してしまつた。李はあんまり笑ひ過ぎて、折角詰め込んだ御馳走を、もう少しでへどにして吐き出してしまふところであつ

兩腕を差し延べて

た。

あくる日の夜が来ると、二人はまた飢えて来た。この時二人は、山北の町まで来てゐたが、その夜までも、宵の口に見て置いたある乾物屋へ忍び入ることにした。

こんどは二度目だけに少し慾が出て、食ふものばかりでなく、賣りだめも搔つ拂つて來ることに極めた。

通りには人通りがなくなり、どこの店も森と寝しづまり、四方に突き立つてゐる山も目をつぶつたやうに眞黒く押し黙つたのを見計つて、二人は、その乾物屋の裏庭へ忍び入つた。隅の鶏小屋で、雄鶏が、クツ／＼、クツ／＼と鳴いた。李は地べたへ匍ひつくばりながら自分へさゝやいた。

「今夜は、う、り、一人で仕事をして來るから、おめえこゝに待つてろ」

そして李は、家の横手の闇の中へ潜つて行つた。

それから二十分もたつた頃だ。ガラ／＼バシヤンといふ物音が家の中からきこえて來た。李の奴、へたにうろつき廻つて、棚のものでもおつことしたのであらう。つゞいて人の叫び聲が起つた。その叫びはすぐに四五人の叫び聲と一緒に、それがドタリバタリといふ物音と共に、家

の中は大騒動となつた。

自分は裏門の所まで出て、いつでも飛び逃げられる身構へをしながら、その騒動の中から逃げ出して來るかも知れぬ李を待つてゐた。が、それは無駄であつた。李の代りに、提灯を持った番頭らしい男が二人ほど出て來た。で、自分は、風のごとく走り去つた。

李の奴、たうとう捕まつたのである。

六

一人になつた自分は、最早しのびをやる勇氣もなかつた。仕方がないので公然と人の軒下に立つて食べ物を恵んでくれと言つた。そして時にはけちなりやくをやつた。

御殿場の町を過ぎて二三里歩いた時であつた。例の裾野の道を、へたり／＼と歩いてゐると、突然うしろから聲がかゝつた。

「お、若い」

自分は弱味があるので、ギクリとして振り向いた。と、五六間後から、印半天を着た恐ろしく、のつぽの男が、にた／＼笑ひながら寄つて來た。仲間の一人である。

兩腕を差し延べて

「へッへ、そんなにビツクリするねえ」とその男は言った。「ところで、おめえが歩いてゐるうしろ姿を見ると、今にも消えて亡くなりさうだぜ。その若さで、そんなにへこたれちゃ仕様がねえな」

「……だつて、まつたくへこたれてるんだよ」

「可哀さうに。ぢや、俺と一緒に歩きなよ。三島へ着きア、げんなりするほど何なりと喰はしてやるよ。それから序でに女も抱かしてやらア」

自分は、その男の言ふことをそのままほんとはしなかつたが、同じ歩くにも人の後について歩くのは樂だつたので、素直にその男の後から歩き出した。

西風がひどく、自分は幾度か吹き倒されさうになつた。相手の男はそれを見てげら／＼笑ひながら言つた。

「おめえのやうなのが、ほんとのひょうろく玉つてんだな」

夜の十時近く、二人はやつと三島町へ入つた。さすがに相手の男も疲れて、ある石橋の上まで來ると、その欄干に凭れて深い肩息をついてゐた。やがて、

「さア行かうぜ」と歩き出したが、この時は彼のうしろ姿も消えて亡くなりさうであつた。彼の

年はもう五十近かつたのである。

それから小一時間、二人は、かびの匂ひのするやうな古ぼけた狭い路次をぐる／＼歩き廻つた末に、やつと辿りついた所は、遊廓の中であつた。

自分は言つた。

「おつさん、めしも食はずに上るのかえ」

「まアいゝ。黙つてついて來なよ」

さう言つて彼は、店の名を一軒々々読んで歩いてゐたが、とある店の前へ來ると、

「しめたぞ！」と言つた。「おめえしばらくこゝに待つてな」

そして彼は、その店の横手の路次へ入つて行つた。

自分はそこで二時間近く待たされた、あいつめ、こゝまで人を引つ張つて來てまきやがつたなとも思つたが、店の横手の破目に凭れてしやがんでゐるうち、飢ゑと疲れとが一どきに襲つて來て、もう起ち上る力もなくなつてしまつたのだ。で、その場でおかかんをするつもりで、ごろりと地べたへ寝ころんでしまつた。すぐ頭のところで長い小便をして行く酔客もあつたが、自分ほどなりつけてやる氣力もなかつた。

兩腕を差し延べて

と、そこへやつとのつぼが出て来た。

「おい、早く立つた立つた」

彼は馬鹿に慌て、自分の肩を持つて掴み起すと、ぐんぐん路次を歩き出した。自分はよろぼりながら一生懸命に歩いた。さうして十間ばかり歩いた時、うしろから女の聲がした。

「お父つあん、待つてよ、待つてよ」

ふり返ると、赤い着物をほの暗がりの中にひらめかしながら一人の女が走つて来る。女郎であつた。

「いけねえ」と、彼はつぶやいた。「おい、駈ける、駈ける！」

彼は、自分の片手をひつ掴むと、ばた／＼走り出した。自分の足は棒のやうになつてゐたので思ふやうに走れず、もう少しでつんのめりさうになりながら走つた。

すると、うしろの女が、泣きさうな聲で叫んだ。

「お父つあん……………お父つアーン！」

「駈ける、駈ける」

女はたうとう泣き出した。そして聲限り叫んだ。

「畜生！ 馬鹿、馬鹿、……………畜生！」

二人は、明るい通りへ出ても構はずわたく／＼と走りつゞけ、三四丁来たところで、もう息が切れさうになつて走り止めた。

女の姿は見えなかつた。

お父つあんはハア／＼言ひながら、腹がけの井を叩いて、

「とにかく、これで當分、屋根の下であつたけえめしが食へるてえもんだ」

それを聞いて自分にも、あの女が追ひかけながら泣きながら彼を罵つた譯が解つた。で、自分は、のつぼを下から見上げながら言つてやつた。

「それで、おつさん、娘の年期が二三年延びたわけだね」

「くそ、言ふな！」

彼は、自分の顔へつぼを吐きかけてさう言つた。それから彼は、井の中から一枚の五圓札をつかみ出し、それを自分の手へ持たせて、

「さア、これで別れようぜ。實ア、俺一人でうまく行かなかつたら、おめえの力を借りようと思つてこゝまで引つ張つて来たんだが、俺一人ではなしがついたんでな、ほんとはお禮なんぞする

兩腕を差し延べて

必要はねえんだが」と、いやに勿體ぶつて言った。

「ありがとう」自分は笑ひもせず答へた。「しかしおつさん、俺達ア野たれ死んでも、人の血をすゝつたり肉を喰つたりするやうなことは止さうよ」

「そりア何のこつた？」

「それだけよ。さよなら」

七

しかしとにかく、この「お父つあん」のお蔭で、自分はその後二週間ほどは飢死から救はれたのである。

それから四日目に、自分は清水港の場末のモクチンへ落ちついた。毎日出来るだけのけんやくをして来たので、このモクチンへ着いた時はまだ四圓近くの金が残つてゐた。自分はこれでこゝに根じるを構へ、何とかしてこの港町の仕事にありつかうとしたのである。

翌朝、うす暗いうちに宿を出た。そして港の船つき場へ行つた。荷揚人足に僱はれようとしたのである。が、今まで荷揚げをしてゐた者すらあぶれて、ぼんやりと腕を組んで海面を眺めてゐ

る始末であつた。

で、その翌日は、運送屋へ行つて見た。だが結果は同じことであつた。その翌日は、所構はず街中を歩いた。同じ場所を五遍も歩いた。そして街の隅から隅まで漁り歩いたが、何一つ仕事らしいものは見つからなかつた。

たつた一つ、長い板塀をめぐるした屋敷で、飼犬の運動をさせる仕事があつたが、掛け合つて見ると、日當なしで只晝めしと晩めしとだけを喰はせるといふのであつた。「犬」では、九州の鐵道工事の時の「犬退治」のことが思ひ出された。「犬といふ奴は殺さうと生かさうと勝手なんだ」と熊次が言つたことを思ひ出した。

が、こゝの犬はたゞの犬だが、さう勝手には出来ないのだ。それどころか、自分などよりはるかに人間らしい待遇を受けてゐるのだ。さういふ犬の運動のために日當なしに使はれることは、自分から犬以下になることである。自分はその仕事を捨てた。

が、その翌日の午後、自分はまたその犬の家へ行つたのだ。よくくゞだつたのである。裏門から入つて勝手口へ顔を出すと、おしろいをつけた女中が出て来た。彼女は、こつちの汚ない姿を眉をひそめて見下しながら言つた。

兩腕を差し延べて

「うちの犬は千圓もするんですよ。そして毎日一圓五十錢もかけて育てゝゐるんですよ。だから、見ず知らずの人を頼むわけには行かないんですよ」

こんなこと今更らしく書くだけ野暮だ。

腹を立てるのも野暮だが、自分は、往來で行き會ふ人のだれかれ構はずなぐりつけたくなくて困つた。宿へかへつて来ると、部屋の真中へどたとふんぞり反つてしまつた。

どうにでもなれといふ氣持ちだつた。

間もなく、

「おい大將、どうした」と言ひながら襖を開けて入つて来た男がある。見ると一間置いた部屋に夫婦で泊つてゐるバナ、の露店商人であつた。頭髮がうぶ毛のやうに薄くすがれた、一重まぶたのひ弱さうな男であつたが、ものを言はせるとなか／＼元氣があつた。自分が来る三日前からこへ泊つてゐて、午後から夜にかけ、船着き場へ店を出してゐたのである。

「どうもかうもないよ」

自分はふんぞり反つたまゝ答へた。

「まアさう言ふな」

言ひながら彼はあぐらをかいて、

「さア、起きて、バナ、でも食べなよ」

彼はバナ、の一房を持つて来たのである。

自分は起き上つた。彼はまた言つた。

「おめえなんざ獨り者だし、第一若いし、悲觀することアねえ。そのうちにア、別嬪で働らきのある女に惚れられるぜ」

自分は笑ひもせず、バナ、を頬ばつてゐた。

「このどや（宿）のあの二人の娘だつて、なか／＼別嬪ぢやねえか。分けても妹の方が。でも働らきのあるのは姉の方だよ。何でもあの娘は毎晩港へ出て行つて、つまりその持ち合せのからだでさ、たんまり稼いで來るてえ話だ。俺が一人なら黙つて見ちやゐねえんだがな」

自分はそれにも合槌を打たなかつた。しかし彼は、うぶ毛の頭をとき／＼撫で廻しながら、ひとりでしゃべり立てた。

「ところで、俺の噂もなか／＼の働らき手でさ。何しろ、小間もの行商の序でに外の行商もやつてやがるんだからな」と、言ふや、彼はから／＼と笑ひ出した。如何にも、屈托のない笑ひ方で

兩腕を差し延べて

ある。

「それだから、なんでさア、俺を相手にも行商のつもりでゐまさアね。——もうちゃんと順序がきまつてまさア」

これには自分も思はず苦笑した。

「そこでどうだね、おめえも一つ男になつて見ちや。まったく悪い氣持ちのもんぢやねえぜ」
さう言つてゐる所へ、その女が、どたりと太い足を踏み入れて來た。彼女は、彼より年上に見えた。決して美人ではなかつたが、その首や肩が牛のやうに盛り上つてゐて、見るから精力が溢れ餘つてゐるやうな女であつた。その言葉つきから察して、琉球女だらうと自分は鑑定した。

彼女は、自分の横手へ、その太い脚を投げ出すや、

「あんた、まつたくいゝ男ね、一緒にならうか、可愛がるよ」と言つた。

しかし、亭主は平氣な顔をして、

「それで、俺はおはらひばこかえ」と言つた。そして立ち上り、「ぢや、俺アあつちへ行つちやいませう」と、部屋を出て行つてしまつた。

女は、亭主が部屋を出るか出ないうちに、

「ねえ、あんたはほんとにいゝ男だよ」と言ひながら、自分の膝頭へにじり寄つて來た。

「だけど、おら順序をふめねえんで」自分は少し後去りながら言つて見た。

「勉強しとくよ」

「てんでふめねえんだよ」

「からつけつ？」

「さうなんだ」

「おや／＼」と女は言つて、両手をうしろへ突いてもつくりとした腹を突き出した。自分は目を反らして少し息を弾ませると、

「まつたくうぶだねえ。」

と女は言つた。自分は抵抗する力を失つてしまつた。

そのあとは自分もさすがにその亭主に對して面はゆかつた。で、翌日はいつまでも床の中にもぐつてゐた。仕事を探しに出たところで無駄骨を折るばかりでもあつたので。

すると、例の亭主がまた自分の部屋へ入つて來て、

「ゆうべは素晴らしかつたさうで」と言つて、また何の屈托もなくから／＼と笑つた。

兩腕を差し延べて

こんな夫婦もあるものか。と自分は舌を捲いた。彼は更らに、「だから大將、悲觀しちや駄目だつていふんだ」と言ひながら出て行つたのである。

八

この事件があつてから、すっかり減入り込んでゐた自分はどうかやら元通りに持ち直したのであつた。行商夫婦に對しては、全く何ともくすぐつたい気持ちであつたが、しかし同時に何か笑へないものを自分は深く感じたのである。

さてその夕方であつた。行商夫婦はまだ歸つて來てゐなかつた。自分は窓に凭れて、ぼんやりと西空を眺めてゐると、階下から、けたまほしい女の叫び聲がきこえて來た。

自分は耳をそば立てながらも見に行くのを遠慮してゐたが、あんまりひどい叫び聲なので、恐る／＼階下へ降りて行つて見た。

と、妹娘——おきみが、梯子段の眞下の土間へ突つ伏して、ひい／＼泣き叫んでゐるのであつた。一方を見ると、妹娘が目を吊し上げて突つ立つてゐる。

「どしたんだ？」自分は訊いた。

妹娘は、自分をジロリと見上げて、

「お前さんは、妹に惚れてんだねえ」と來た。

「何を言つてるんだい」

自分は土間へ降りて、おきみを抱き起さうとした。すると、姉は自分の肩を引き戻して、

「餘計なことをしなさんな。この餓鬼はね、自分ちや一文の稼ぎもしないで、ひとの稼いだ金ばかり搔つ拂ひやがるんだよ。こんな奴ア、叩き殺してやるんだから」

それにも構はず自分は、尙もおきみを抱き起さうとすると、姉はその大きな體軀で自分の胸へ突つかゝつて來て叫んだ。

「この唐變木、手めえのやうなグレにさわらせるくらゐなら、とつくに女郎に叩き賣つてゐるよ。黙つて引つ込んでやがれ」

かうなつては自分も手の出しようがなかつた。自分は黙つて二階へ上つてしまつた。

その後の夕飯時になつた。おきみがいつもの通りお膳を運んで來たので、自分は訊いた。

「姉さん、今、家にゐる？」

「……………さつき出かけて行つたわ」

兩腕を差し延べて

「あの姉さんは、君のほんとの姉さん」

「うゝん」とおきみは首を振つた。

「ぢやお母さんは？」

「おつ母さんもちがうの」

「それぢやあの姉さんのおつ母さん？」

「それもさうぢやないのよ」

「おとつアんは？」

「おとつアんもちがうの」

驚いたことに、この宿の親子四人はみんな何の血縁もなかつたのである。親爺は酒ばかり飲んでゐる。母親は寝てばかりゐる。姉は夜な／＼港へ稼ぎに出る。妹は姉の金を搔つ拂つてゐる。

——四人が四人、はなれ／＼になつて勝手なことをしてゐるのである。この事情を知つて始めて自分には合點が行つた。

自分は暗い思ひで、めしを食べ始めた。

おきみは、壁の根に坐つて首を垂れてゐた。いつもは膳を置くとすぐ立つて行つたが、その夜

は動かうとしなかつた。

やがて、自分がめしを食べ終ると、おきみは一層深く首を垂れ肩を波打たせて、かすかに言つた。

「あんた、あたしを連れて逃げておくれよ」

それから少し聲を強めて、

「ね、ね、お願いだから」

自分は少し面喰つた。同時に昂奮して來た。で、おきみの傍へ寄つて行つて、靜かに抱き起してやつた。

おきみは首を縮めたまゝ、自分の胸へ凭れた。自分は片手をおきみの顎へ當て、無理にその顔を持ちあげた。さつき泣き叫んだ後のまぶたがまだ腫れ上つてゐて、それが堪らなくいとほしい感じだ。

「そのうちに、きつと連れ出してやるよ」

自分は熱つばい聲でさう言つてやつた、

「うん／＼」とおきみは鼻聲で言ひながら、ぼつてりした頬を自分の首へ押しつけて來た。

兩腕を差し延べて

ところで、このことがあつてから幾日かすぎた夜のことだ。自分は、おきみが姉の後について港へ稼ぎに行つたことを知つたのである。港でバナナの露店を開いてゐる例の男が、それを見届けてさも面白さうに自分へ報告したのだ。

何といふことだ！ 自分は無茶苦茶に腹が立つた。その時はもう十二時を過ぎてゐたが、自分は階下へ降りて行つて、寝てゐたおきみを自分の部屋まで引きずり上げて来た。そして所構はず蹴つたり踏んだりした。

その夜は姉が歸つてゐなかつたので、母親が上つて来た。母親は自分へ向つて、

「こん畜生、何しやがるんだ、畜生、畜生！」と、畜生を連發した。

自分はそれを尻目にかけて亂暴をつゞけた。しかしおきみは泣かなかつた。そしてこつちのするまゝに任せながら言つた。

「おつ母さん、いゝのよ、いゝのよ。あたしが悪いのよ………」

そこへバナ、賣りの夫婦が出て来て、この活劇はおしまひとなつたが、その翌朝、自分は、この宿を追ひ出されてしまつたのである。親爺と母親と姉娘と三人がゝりで、まるで野良猫を叩き

出すやうにして自分を追ひ出してしまつたのであつた。

おきみが後から追ひかけて来るかと思ひ、自分は正午近くまで、この宿の近所を離れずゐたが、つひにおきみは姿も見せなかつた。

自分は意地にもそのまゝそこを去ることが出来なかつたので、もう一度宿へかへり、おきみを掠奪して来ようかと思つてゐると、例のバナ、屋が商賣の車を引いて出て来た。

彼は、自分の傍へ寄つて来て言つた。

「大將、あきらめなよ。おきみはな、梯子段の裏のあの穴藏のやうな部屋ん中へ押し込められちやつてるんだよ」

九

その翌々日、自分は静岡市へ来てゐた。

おきみの事件は、何んにも持たない自分から更らに何ものかを奪つた。何だか、ぼんのくぼに大きな穴があいたやうな感じだつた。そして見當が——生きて行く見當がつかなくなつて来たやうな感じだつた。

兩腕を差し延べて

「いけねぞ。しつかりしろ！」

自分は幾度かさう自分へ警告した。

先づ金を大事にしなければいけない。この際飢ゑることが何よりの禁物だ。さう思つた自分はモクチンへは着かず、七間町通りのある芝居小屋の裏手へもぐり込んで夜を明した。そして日中は、清水港でやつたと同じやうに、市中處構はず歩きながら仕事を漁つた。

無かつた。仕事と名のつくものは指の先ほどもなかつた。

三日目に雨が降り出した。そして自分は、芝居小屋の裏から逃げ出さねばならなかつた。自分は僅か残つてゐた金を頼りに、ずつと北の街端れのモクチンへ着き、一日一度のめしを食つて三日ばかり寝て暮した。

それから起き出してまた仕事を漁りに出た。何があるものか。

いやもう仕事のことは言ふまい。それより、その日の夕方、モクチンの部屋へ歸つた時から始まつた一つの哀れな出来事を書くことに移らう。

部屋へ入ると、床が敷かれてそこに、一人の蒼い顔に髯をぼう／＼に生やした男が寝てゐただ。

その男は自分を見ると變に光る目を向けて言つた。

「あなたはどなたですか？」

見かけに依らず、丁寧な物の言ひ方である。

「わたしですか。わたしはこの先客でさア」

さう答へると、彼はげんげんな顔をして、

「先客？」と言つた。

自分は黙つてゐた。浮浪者に取つては寝る場所がこの世での唯一の自分の世界である。だから

その世界をむやみに荒らされては堪らないのである。

しばらくして彼は、頭を心もち枕から持ち上げるやうにして言つた。

「もし」

「何です？」

「どうも濟みません。あなたの部屋を占領して濟みません」と言つたかと思ふと、枕へうつ伏して、力のない咳をした。——彼は胸をやられてゐたのである。

彼は咳の止むのを待つて、うつ伏したまゝ、疊に向つてものを言ふかのやうに小さな聲で言ひ

兩腕を差し延べて

出した。

「わたしは、昨日、この町端れで野たれ死ぬところを、お巡りさんに救はれたんです。それから町役場に引き取られ、さうして町長さんのお世話で、このお宿へ着かして貰つたんです。それも一週間と日を限つて。ですから今日から一週間目にはこゝを出なければならぬのですが、おそらくそんなことはしなくてもいゝやうになるでせう」

はじめは不愉快な侵入者と思つたこの男が、自分は堪らなく氣の毒になつたので、本氣になつて言つてやつた。

「そんなことを言はずお大事になさい。及ばずながらわたしも何かの役に立つてあげますから」
「ありがたう、済みません」さう言つて彼は目をしばたゝいた。涙がポト／＼曇の上へ落ちた。

夕飯のあと、彼は今の身の上に就て話した。それに依ると——彼は今から五年前までは甲州のある田舎で小學校の教師だつた。それから三年前までは横濱市の吏員だつた。さうして一年前までは、同じ横濱市のあるビルヂングの守衛だつた。が、それが彼の最後の定職であつた。それから彼は、どんな仕事でもした。そのどんな仕事も彼の一家族を養ふには足らなかつた。彼は、妻と二人の子供を持つてゐたのである。

今から半年ほど前である。つひに彼の妻は二人の子供を連れて行衛を晦ましてしまつた。それは彼に取つては一つの救ひになると思つた。これからは、自分一人が氣樂に生きて行けると思つたが、結果は反對であつた。彼は妻子に去られると同時に、自身の氣力と體力にも去られてしまつたのだ。重荷を下すと同時にへたばつてしまつたのだ。

その結果は更らに不幸な結果を産んだ。今から三月ほど前、彼は突然咯血したのである。彼はがらんとした家の中に一人寝ながら、家財道具を一つづゝ賣り拂ひながら生きつゞけた。そのうちそれも出来ない日が來た。——彼はその家を追はれた。

彼は、郷里の和歌山の田舎へ、しかも今では遠い親戚が一二軒あるきりのその田舎へ歸りつくことを唯一の希望として、毎日血を吐きながら西へ西へと歩いた。だがこの清水港まで來て、つひに行き倒れてしまつたのである。——といふのであつた。

自分は慰めやうもなかつた。しかし何とかしてやらねばならぬと思つた。そこで次の日から、虎の子の金を割いて、彼のからだのためになるやうなものを買つて來てやつては喰はした。その度に彼は、済みませんと言つて涙ぐんだ。

しかしこれも長くは續かなかつた。五日目には懐がきれいに空つぽになつてしまつたからであ

兩腕を差し延べて

る。自分は言った。

「でも氣を落さないでくれ。何とかして仕事にありついて、あなた一人のからだぐらゐは養つて上げますからね」

すると彼は、自分の膝へすがりついて、聲をあげて泣き出した。

この時の彼の慟哭の聲は、今でもこの耳に残つてゐる。

一時間あまりも彼は泣き咽んでゐたらうか。やうやく平靜になつたかと思ふと、どつと、今までのにない咯血が來た。さうして彼は殆んど血の氣を失つて、がつたりとなつてしまつた。

その夜半の一時頃である。彼は兩手を延して宙を掻き廻しながら何かに掴まらうとした。自分は起き上つてその枕元に坐り、自分の兩手を掴まらしてやつた。

すると、彼はそれを拂ひ除けて、

「違ふ」と、かすれた聲で言った。

「ぢや、なに？」

「なんだかわからない。でも早くつかまらして、しつかりとつかまらして……」

「奥さんの手？」

「違ふ」と彼はさも憎々しく言った。

「子供の手？」

「さう。……だが、もつと外のもの」

「困つたなア」

「そんなことを言はないで、早くつかまらして。もつと外の、大きな力のあるもの、それを、それを……」

さう言つてゐるうちに、宙へ差し延べた兩手がぼたりと疊の上へおつちた。それきりであつた。それから十分とたゝないうちに彼のからだは冷えてしまつたのである。

書くことはまだ／＼あるが、もう止す。

父 親

壁一重の隣は、父親とその娘の二人暮しであつた。この親子と牧山は、その二年ほど前からさうしてに暮してゐた。

牧山がはじめて知り合つた當時は、娘の方はまだ膝きりのセイラー服を着て、近く的高等小學校へ通つてゐた。素足に靴をはいて、いつも潑刺と飛び歩いてゐた。が、小學校を卒へて、家の留守をするやうになり、そして一年あまりするうち、娘はいつか、娘らしくなつてゐた。その顔にもからだにも、とろりとした圓みが現はれて來て、いつもしめてゐるメリンスの赤い帯が妙に色つぼく見えて來た。

牧山は、自分の身邊に一つの明るい花が、日毎に咲き映えて來るやうに感じてゐた。

父親の方は、朝早く、牧山が寝てゐるうちに家を出て、夕方六時を過ぎると歸つて來た。夏冬詰襟の服で、冬になると大分飴色になつた黒のトンビをその上に着た。夕方、うす暗くなつた路次を、そのとんびの兩袖をばさ／＼振りながら歸つて來る父親の姿を見る度、牧山はよく蝙蝠を聯想した。

またその父親の顔も、細長く尖んがつて、小さな目がキロリと光つてゐて、何となく蝙蝠の顔を想はせ、ちよつと親しめない顔であつた。で牧山もこの二年の間に、つひぞしみ／＼と話し合つたこともなかつた。

しかし父親の人となりは、その顔ほどに陰險でないことが、娘の嫉けぶりを見てわかつてゐた。彼は娘をいつも「千代子オ……」と情味をこめて呼んでゐた。何か教へるにも言ひきかせるにもまた叱るにも、一種の慈味と温情とがよくにじみ出てゐて、壁を隔てゝ聞いてゐる彼もホロリとすることがあつた。

父親の仕事は、品川の方のある小さな印刷屋の外交で、収入も至つて僅少らしく、従つてその暮しぶりも實につまみやかであつた。彼はその印刷屋まで、四十分あまりかゝるといふ道を毎

日歩いて往復してゐた。娘もこの二年間に新しい着物を仕立て、着たことは一度もなかつた。足袋などもつぎだらけのをはいてゐた。しかし娘は、その足袋をいつも光るやうに眞白なのははいてゐた。模様の褪せた着物も、いつも気持ちよくさつぱりとしてゐた。

牧山はいつかこの親子の生活に、一つの美しさを感じるやうになつた。殊にその娘には、野末の雑草の中にさゝやかに咲いた螢草の、あの澄み通つた空色の花を發見した時のやうな、清らかな美しさを見出した。

それは十二月に入つて間もないある夜であつた。

低い屋根をゆるがすやうにして吹き荒れてゐた木枯らしが、夜半近くなつてやうやく風いだと思ふと、庇のトタンがバラ／＼と鳴り出した。夕方にもちよつと降つた雲だ。

萬年床へもぐつて、翻譯の下読みをしてゐた牧山は、そのバラ／＼といふ奴をきくと、ソクツとして本を投げ出し、毛布の中へ頭を引つこめた。

雲はしかし、しばらくして止んだ。あたりは急に森となつた。

と、壁一重の隣から、人の忍び泣く聲がして來た。ほそ／＼と消え入るやうな聲である。つゞいて、それをなだめるやうな、また叱るやうなしわがれ聲がして來た。牧山は引つこめた頭をま

た出して、聞き耳を立てた。

忍び泣く方は娘で、しわがれた聲の方は父親である。が、この雲の降る夜更けに何事であらう、牧山は一層息を殺した。

けれどそれもしばらくして聞えなくなつた。娘の忍び泣く聲も雫が絶えるやうにして消えた。

牧山は、枕元のスタンドの灯を消し、こんどは頭からすつぽりと毛布をかぶつた。

翌朝、牧山は床をはなれると、齒をみがきながら庭へ出て、何気なく隣の容子をうかがつた。すると娘は、例の赤い帯をしめた背を陽に照らされながら、縁先でせつせと張り物をしてゐた。その姿には何の暗さもまつはつてゐなかつた。彼はホツとした。

ところがその翌朝彼が起き出したときは、娘の家の雨戸は閉めきつてあり、娘の姿はどこにも見えなかつた。夕方、父親と一緒に歸つて來るのであらうと思つてゐたが、父親はいつもの時刻に一人かへつて來た。そして臺所へ入つて何かごと／＼させながら、夕めしの仕度にかゝつた。

そしてそれは、その翌日もまたその翌日も變りがなかつた。牧山はぼんやりと考へこんでしまつた。

三日目の夕方であつた。牧山は往來へ出て、父親のかへりを待つて、先づ、

父 親

「おかへりなさい」と、親しみ深く聲をかけた。娘に就て何か訊き出すつもりであつた。

「只今かへりました」と、父親は帽子を取つて丁寧に頭を下げると、

「實は、遽に御挨拶に上るところでしたが、つい……」と言ひかけて、その細い顔を伏せた。それからそのまゝの形で「實は娘を、わけがありまして横濱の方の知り合ひの家へ預けまして……。いろ／＼お世話になりましたが、これからまた日中留守になりますので、何分よろしくお願ひ申します」

牧山は、やつぱりさうかと思つた。彼はそのわけといふのを訊かうとしたが、灰色に禿げた小さな頭を垂れてちつとしてゐる父親の姿を見ると、それを訊くのが残酷な氣がした。

「さうですか、それは……」牧山は曖昧にして、「お留守の方は御心配ありませんから」と言ひ添へて家へ入つた。

二

それから半月ほどした夜であつた。表口に、ごめんなさいといふしわがれた聲がした。娘の父親であつた。父親が表口からさう言つて入つて來たことは曾つてなかつたことで、牧山は、何か

吉報と凶報とを半々に迎へるやうな氣持ちで、父親を招き入れた。

いつもの萬年床はその夜は敷いてなかつたが、古雑誌や古本を一ぱい散らしてあつたので、牧山はそれを一方へ掻き寄せ、机の傍から瀬戸火鉢を引き出し、その前へ座布團を置いた。

父親は、固く折目のついた黒の羽織の裾を拂つて、その座布團の上へきちんと坐り、

「御勉強のお邪魔をしまして、何とも濟みません」と言つてちつと火鉢の火を見詰めるやうにしてゐたが、

「少しばかりお尋ねしたいことがありまして」と切り出した。

「どうぞ御遠慮なく」

牧山も、誠意を含めた聲で答へた。

父親は懷紙を出して、しゆんとはなをかんで、そして言ひ出した。

「外でもありませんが、娘千代のこと……先だつては、横濱の方の知り人の家へ預けたやうに申しましたが、實は赤の他人のある西洋料理屋へ奉公に出しましたのです。近頃出來た山ノ手の大きな店で、それもあの女給さんといふのではなく、奥女中の方で、ですから店のお客の前へ出るなどといふことはなく、至つて物固い勤めだ、といふ仲へ入つた人の言葉をそのまゝ信用し

まして、あゝして出してやりましたのです。ところでタベのことですが、その店といふのをわたしも一度見て置かなければ安心がならないので、勤めのかへりに廻つて見たのです。行つて見てびっくりしました。その店は、溝川に沿つた凹地にありまして、その凹地一帯の軒並が、あの赤い灯や青い灯がギラ／＼光つてゐる店なのです。さうしてその軒並の入口に、毒々しい着物や洋服を着た女共が、恐いやうなお化粧をしてすらりと並んで、通る男達へ聲をかける、飛びついて帽子を取る、揚句が腕づくで引きすり込む、といふ有様なのです。わたしもあのとんびの袖を破かれました。さうしてその女共の言ふことがまた途方もないことなのです。見たところ、どこにでもあるあのカフェーやバーの構へなのですが……」

父親はそこで、牧山の顔を下から覗き上げるやうにしながら、

「わしは、あゝいふ社會のことは一向に存じませんが、だからこんなことにもなつたのですが、すべて近頃のカフェーとかバーとかは、あゝいふことをしてゐるのでせうか？」

牧山はすぐは答へかね、ばしらくして、

「一體それは、何處ですか？」と訊いて見た。

父親は、横濱驛からの道順と、その場所の町名を言つた。それは誰でも知つてゐるあのホテル

街のある場所とはまるで方角違ひであつた。牧山は言つた。

「まるで見當がつきません。人からも聞いたことがありませんが、確かにその中は、さういふことをしてゐる店ばかりなのですか？」

「うそであつてくれゝばいゝと思つてます。夢であつてくれゝばいゝと念じてゐます。が、わたしは確かにこの目で見えて來たのです。この耳で聞いて來たのです」

「娘さんにもお會ひになつたのでせう？」

「馬鹿な！」と、父親は突然何かをたゞきつけるやうにして、「さういふ場所だと知つて、その中に娘が棲んでることを知つて、父親がその娘に會ひに行けますか。わしは歩いてゐるうちにうっかり娘のゐる店の前へ出たので、飛んでかへつたのです。夢中で逃げ出して來たのです」

父親はそこで苦しさうな咳をして、先をつゞけた。

「ねえ牧山さん。ごらんの通りわしは外交の歩合取りで、あの娘にも足袋一足買つてやれませんでした。それでついあの娘にも働らかせる氣になつたのですが、いやその外のわけもあつたのですが、それにしてもあんな場所へつれ込まれてゐるといふのは、何といふことです。わしは大事な一人娘を亡くしてしまいました。いや、殺してしまいました」

牧山は父親のその語調にたじろぎながらも、その言葉をおさへつけるやうに答へた。

「そんなことを言つちやいけませんよ。あなたの娘さんが、さういふ女共の仲間に入つてゐることをあなたは確かめては來なかつたのでせう。娘さんは女中として勤めたのなら、やつぱり女中として働らいてゐるに違ひありませんよ。あの娘さんに限つてそんな……」

「牧山さん、あなたはさう思ひますか。さう信じますか？」

「僕はたしかにさう信じます」

「わしもさう信じたいのです。あの娘に限つて、とさう思ひこみたいのです。しかし牧山さん、あの娘がどんなにがん張つても、店の主人から無理矢理に、あの女共の仲間へ押しこめられたらどうなりますか。あの娘も利口なやうなでもまだやつと十七です。女に取つて何が一番大事かといふことは、まだはつきり解つちやありません……」

「いや、そんなことはありませんよ。娘には娘の身を護らうとする強い本能があるはずですよ。もし主人からそんなことを強制されたら、あの娘さんは逃げかへつて來るはずですよ」

「しかし、逃げかへつて來ないのは、もう父親のわしに、合せる顔がなくなつてゐるからちやありませんか。ねえ、さうも考へられるちやありませんか」

父親はいつか、一種の錯覺状態に入つて來てゐるやうに見えた。さういふ父親に對しては、牧山ももう何とも言ひやうがなかつた。それに牧山自身もさうしてちつとしてはゐられない氣持になつた。牧山は立ち上りながら言つた。

「ちや僕がこれから出かけて行つて、娘さんに直接會つて、確かなところを見て來ませうか」

「それは何とも濟みません」父親は額を火鉢の縁へ届くまで下げて、「さうしていただければ、ほんとうに助かります。ありていに見て來て、ありていに話して下さいまし。お伺ひしましたのも實はそのお願ひもございましたので」

さう言ふと父親は、ふところから古風な褄口を持ち出し、丁寧に折り疊んだ五圓紙幣を取り出して、

「失禮ですが、これを電車賃に」

「まア、そんなことは後にして」

牧山は思ひ立つと急に興奮して來て、あわてゝ洋服に着がへた。

まつ黒な丘が大波のうねりのやうに延びて、上げ潮を湛へた堀割が空の星を映しながら、丘の裾の方へまつすぐに走つてゐる。それに沿つて牧山は走るやうに歩いた。

やがて左手の一段低くなつた所に、赤や青のネオンが寒さうにキン／＼と光つてゐる一廓が見えた。父親の教へてくれた場所がちやうどその見當に當つてゐる。牧山はオーバの襟を立て、その方へ降りて行つた。

その一廓の入口へ踏みこんで見て、牧山はすぐに解つた。それはまさしく、あやしい夜の街であつた。父親の謂ふ「恐いやうな化粧」をした女共が、その生き看板となつて兩側の店先へ立ち並んでゐた。それは合法的のものではあらうが、店構へがカフェーやバーになつてゐるところ、また一方では確かにカフェーでありバーであるところ、非常時のどさくさが生み出した奇怪な新形式の世界に違ひなかつた。

しかしその中を歩いてゐる客といへば、數へるほどしか見えなかつた。職人風のや商人風の男が、影のやうに歩いてゐるきりであつた。その僅かの男達をはさんで、兩側の女共は、手段をえらばない争奪戦をやつてゐた。牧山は帽子を手に持つて歩いてゐたが、幾度かもぎ取られようとした。オーバの襟に取りついて容易にはなれない女もゐた。いきなり背後から飛びついて來た女

もあつた。そして、何かの動物の鳴き聲を想はせるやうな聲が、そちこちに響いた。

かういふ世界にはかういふ世界の雰圍氣が、良かれ悪しかれ漂つてゐるものであるが、こゝは出來てまだ間もないせいにか、何もかもむき出しで露骨でがさついてゐた。そして只、何となく痛ましいやうな空氣が刺すやうに流れてゐるきりであつた。かういふ中に、あの父親の娘、千代子が平氣で棲んでゐるとは、牧山にはちよつと考へられなかつた。

あの父親がびつくりして、夢中で逃げかへつたといふその姿が目に見えるやうな氣がした。

牧山は、左右の路次へ一つ一つ入つて千代子のゐる店を探したが、容易に見つからなかつた。それに、兩側から取りついて來る女共を腕力で押し除けるのにうんざりしたので、ある路次の奥の暗い空地へ入つた所で、息を入れてゐた。

すると、その空地へ一人の女が兩手を脇の下へ入れて、ふらり／＼と入つて來た。取りつかれなくても相手が一人なら大丈夫だらうと思つた牧山はその場にゐる煙草に火をつけた。近づいて來さうに見えた女は、彼から五、六間離れた所に立ち止つて、寒さうに首を縮めながら、空を見上げた。

その姿が、千代子によく似てゐた。肩のあたりのとろりとした圓みが、千代子にそっくりであ

つた。もし千代子だとすれば、こゝで呼びかけたものだらうか、うつかり呼びかけたら、千代子は逃げ出しはしないだらうか、そんなことを牧山は思つたが、しかしもし逃げ出したら、こんどはこつちが腕力で取りつけばいゝと心をきめて、彼はつかつかと歩み寄り、

「千代ちゃんぢやない？」と言つて見た。

「え？」

彼女は暗をすかして牧山の方を見詰めたが、

「あツ、牧山さん。……まア、牧山さん」

そんな風に言つて、逃げるどころか、子供のやうに喜んだ。

「會へてよかつた。ずるぶん探しましたよ」

「まア、あたしを探してらしたの？」

「さうですよ」

「あそびにいらしたのぢやありません？」

「冗談ぢやない。千代ちゃんに會ふためにわざ／＼やつて來たんですよ。お父さんがとても心配してゐるんでね」

さう牧山が言つてやると、千代子はチラツと目を光らして黙つてしまつた。牧山はもう一足そばへ寄つた。

「千代ちゃん、正直に言つて下さいよ。千代ちゃんはお店でどういふ仕事をしてゐるの？」

「あたし、お店で働いてゐますわ」

「だからそれはどういふことを働いてゐるの？」

「お臺所をしたり、お掃除をしたり」

「それだけ？」

「たまには、まちへお使ひに出ますけど」

「それだけ？」

「えゝ」

さう答へてゐる千代子の顔はなんのお化粧もなく、それはいつもの地肌のまゝで、牧山が會つて螢草の花のやうにたとへたまゝのすが／＼しい色をしてゐた。着てゐるものも、店先に並んでわい／＼やつてゐる女共の着物とは似てもつかない、黒つばい銘仙であつた。

「ぢや千代ちゃんは、あの店先に立つてゐる女共のやうな勤めはしてないのね」

「まあ、あたしがあんなこと！」

千代子は目を圓くして、ひどいことを訊くといふやうな顔をした。その顔がまたいかにも無邪氣だった。

「それで安心しました。けど千代ちゃんはこの中になんか何とも思はない？」

「だつてあたしは、違つたことをしてゐるんですもの」

「そりやさうだらうけど、あんな女達を毎日見てゐるのだから」

「だつてあたしは別なんですもの」

千代子はますます無邪氣な顔でさう言つた。千代子はてんから單純に、自分とあの女共とは全然別種の人間で、だから何のかゝはりもないのだといふ風に考へてゐるらしかつた。

牧山はこゝまで來て、現在までの千代子は女中としての勤め以外のことは何もしてゐないことを確め得たやうに思つたが、今後のことを想ふとまた大きな不安が感じられた。第一千代子のその無邪氣さと單純さが危険に思はれた。外の女共の暗さ惨めさを實感出来ないのは無理もないが、同時にそれを恐れることを知らず、平氣で身も心も開け放してゐるやうなのが實に危なつかにしく思はれた。牧山は言つた。

「とにかく近いうち暇を取つて、外の堅氣の家へ勤めかへることにした方がいゝと思ひますよ。

千代ちゃんもこゝへ來るまでは、こんなところへ勤めるとは思はなかつたんでせう？」

「えゝ。でもあたし構はないの」

「構はないぢやいけない。お父さんはもう氣が轉倒しかけてますよ。ほんとを言へばお父さんもゆうべこの中へ來て見て、もうびつくりしちやつて、千代ちゃんにも會へずに歸つて行つたんですよ」

「馬鹿ねえ……」千代子はさう言つてかろく笑ひ、寒さうに肩をすぼめた。

「寒さうだね。それにもう店へ歸らないと悪いだらう？」と牧山は勞はるやうに言つた。

千代子は首を振つて、

「夜はあそんでゐていゝんですの」と言つて、しばらくして、「あたし暇を取りたくも、このまゝは取れないんですのよ」と顔を伏せた。

「それはどうして？ どういふわけ？」

牧山は少し強い聲で問ひつめた。すると千代子は細々とした聲でかういふことを言つた。

「あたしね、お店からお金を借りてゐるの。二年分のお給金を前借りしてありますの。お父さんにお金

のいることが出来たので……。だからその金を返さなければ暇を取るわけには行かないでせう」この話を聞くと牧山は、それは冗談ぢやないと思つた。父親がなぜその金が必要であつたかは別問題としても、父親はどういふ契約の下に、さういふ金を借りたかゞ問題であつた。もし單に女中奉公の給金の前借として二年分の金額を借りたのであれば、それはまふと一ぱい喰はされてゐるからであつた。かういふ場所柄のかういふ店が、只の女中の給金に二年分も前貸しするやうなことは絶対に考へられないからであつた。言ふまでもなくその裏面には一つのからくりがあるのだ。それはかういふ店がかたぎの娘を手に入れる場合の常套手段であるのだ。女中とは表面の名で、つまりは他の女共と同様、千代子を「夜の女」として、それだけの金額で買ひ入れたに過ぎないのである。あの父親が、さういふ事を承知の上で、千代子をこの店へ勤めさせたのであることは、父親の今夜の驚きと慌て方を見ても解る。父親はきれいに彼等のからくりにつかゝつてゐるに違ひなかつた。

かうなれば問題は先づ千代子から離れて、再び父親の方へ移らねばならない。さう思つた牧山は、

「さういふ事情のあることは僕は知らなかつた。それぢや家へかへつて、お父さんとよく相談して近いうちにまた来ますよ。それまで、しつかりと眞面目に今の勤めだけを勤めてゐて下さいね。わかつた？」と念を押した。

千代子はうなづいた。牧山はつゞけて、

「千代子ちゃん、女の身に取つて一番大事なことは何か知つてゐるね？」と言つて見た。すると千代子はすぐにもつと大きくうなづいた。

それは小學校の生徒が先生の質問に答へるやうにあどけなかつた。牧山はそこにも頼りなさを感したが、

「さうだ。それさへ解つてりや安心です」と生徒を褒めるやうに答へるしかなかつた。

牧山はそこで別れようとする、千代子は追ひすがるやうにして、

「あのね、お金のこと、お父さんには言はないで下さいね！」と言ひ、それから獨りさゝやくやうに、「お父さんが可哀さうなもの」と言つた。

牧山は何かハツとして、

「あゝさうか、それはよくわかつてゐる」と答へてやつた。

終電車にやつと間に合つて家へかへつて見ると、父親はまだ牧山の部屋にきちんと坐つて、牧山のかへりを待つてゐた。牧山は元氣よく言ひ出した。

「お父さん、大丈夫、心配御無用ですよ。なるほどあの中は大へんなところですが、千代ちゃん
は眞面目に女中さんとして勤めてゐるだけですから」

「千代子にちかに會つてくれましたか？」

父親は充血した小さな目をまともに向けた。何時間か前の興奮がまだ消えてゐないのだ。

「確かに會つて、何もかも聞いて來ました。千代ちゃんは神様のやうな心を持つてます。あれぢ
あどんな悪魔だつてどうすることも出來やしませんよ」

「さうでせうか。そのまゝであの娘はずつと勤め通せるでせうか？」

「それも大丈夫でせうと思ひますが、しかしそのことについては後でゆつくり御相談しませう。

今夜はもう遅いですから、まア安心してお休みなさい」

「いや寝るわけには行きません。そのことを考へると、眠らうたつて眠れやしません」

父親はそこはどこの家かも忘れたやうに、人の迷惑など思つて見る餘裕もなくなつてゐるのである。

「千代子が、わしのことを何とか言つてませんでしたらうか。わしに對して何か不平がましいことを言つてませんでしたらうか？」

「不平がましいどころか、お父さんのことは心から思つてゐます。お父さんが可哀相ですと言つてましたよ」

牧山がうつかりさう言ふと、父親はがくと首を垂れて、しばらく黙つてゐた。それから首を振りながらおろ／＼と、

「わしは、大間抜けの大馬鹿の親爺です」と言つて、實に苦さうな笑ひを口のはたに浮べてゐたが、あとは獨りごとのやうに言ひつゞけた。

「……わしは、あの娘が赤ん坊の時分にもあの娘を殺しそこなつたことがあるのです。おんぶをしてゐて、いつの間にか紐が腕からはづれて、その首にひつかゝつてゐたのです。そして氣がついて見るとあの娘の息が止りかけてゐたのです。その時もわしは死んだ女房から、大間抜けめと怒鳴りましたが、今またわしはそれと同じやうなことをしてゐるのです。二人は互ひに手を引

き合つて生きてゐると思つてましたが、今度の事件で、互ひはいつの間にか背中合せにくくりつけられてゐることが解りました。わしが息をしようとするれば、千代子の首が止まる。千代子が生きようとするればわしの息の根が止まるのです。千代子のためならわしは死んでも苦しいございませぬが、わしが死んだとて、千代子の首をくくりつけた紐は取れさうもありません。さうして二人をさういふ風にくくりつけた紐がどういふ紐か、昨日今日になつてやつと判別のついた自分の間抜けさ加減が、なさけなくてくやしくてならないのです……」

前借のことで、それだけは父親に言つてくれると言つた千代子の氣持ちを、牧山はいろ／＼に考へて、そのことはうっかり言ひ出せないと彼は考へて來たのであつたが、今、父親がさうまで言つてゐるのを聞くと、遠慮なく事の顛末を訊きたゞして見ようといふ氣になつた。どうせそれを訊かねば、解決の端緒もつめないと思つたので。

「ちや遠慮なく伺ひますが、あなたは千代ちゃんの前借のことで、あの相手から一ばい喰はされてゐやしませんか」

「一ばいどころか、二ばいも三ばいも喰はされました。いや、とんだわなに引つかゝつたものです。それを考へるとわしは息がつけなくなるのです。牧山さん、聞いてくれますか。もうしまつ

て置くわけには行きませんから、みんなぶちまけます。牧山さん、聞いてくれますね？」

父親は膝をのり出し、牧山の手を取らんばかりにしてそれを言つた。それからどもつたり溜息をついたり膝頭を叩いたりして、かういふことを話した。

千代子を女中として今の店へ棲みこませて間もなく、父親はその店の主人から、千代子の二年分の給金を纏めて前借りした。なぜそんな金を前借りしたか。それは別口の借金を支拂ふためであつた。四年ほど前、千代子の母親は一ト月あまりある病院に入院したまゝ死んでしまつた。その時父親は、現在も勤めてゐる品川の印刷屋の主人から、相當の利のついた金を借りて、入院費と葬式費とに當てた。その借金が殆んど支拂へずにあるうちに、利に利がついて、四年後の現在には凡そ元金の五倍となつた。するとその一ト月ほど前、印刷屋の主人は突然、その金の返済を要求した。そしてもし今年中に返済が出来なければ、今後六ヶ月間の歩合給料の全部を没收すると言ひ出した。これは取りも直さず、千代子親子に對してその餓死を宣告したも同然であつた。父親と千代子は全く途方に暮れた。

と、ある夜印刷屋の主婦が父親の家を訪ねて來て、主人には内緒ですよと前置きをし、千代子の女中奉公の話を持ち出した。横濱の山ノ手にこんど大きな西洋料理屋が出来て、奥女中を探し

てゐる。給金も普通の二倍はくれるし、勤めぶりに依つては一年分ぐらゐの給金の前貸しもする。千代子のやうにきりやうがよく働らきのある娘なら、二年分でも貸してくれるだらう。何しろその店は、奥女中達を家族同様に扱つて、行く／＼はお嫁にまで世話してくれるといふ、今時には珍らしく話のわかつた店で、あたしはその店の主人夫婦とはずつと以前から懇意にしてゐるので氣性もよく知つてゐるし、一旦約束したことは必ず守るといふ義理がたい人達だといふこともよく知つてゐる。で、こんな機會はまたと來るものではないから、思ひ切つて千代子をそこへ預けて見たらどうですか、といふのであつた。

主婦はそこまで話して置いて、ちよつと聲色をかへ、實はあなた達だから打ち明けるのだが、あたしも若い頃は、日本橋のある大きな日本料理屋に奉公してゐた。料理屋といへば水商賣で、ろくなことは覚えなからうと思ふでせうが、本人さへ眞面目に勤めれば、あれほど身の爲めになる所はない。今の主人ともその店の世話で一緒になつたのだし、今の印刷屋もその店から貸して貰つた金で始めたので、それがあそこまで大きくなつたのもあたしがさういふ店で苦勞をしたのが縁の下の力もちになつたからですよ、と言つてホツホと軽く笑つた。

父親は、主婦のこの話しぶりにすつかり魅せられてしまつた。同時に、もう五年間も稼がして

もらつてゐる店の主婦の言ふことでもあるので、その話もそのまま信用してしまつた。そこで父親は、では千代子と相談して、千代子が承知してくれれば是非世話していただきます。そしていくらでもお給金の前借りが出來たら、それをそつくり御主人の方へ廻しますから、歩合給料の没收といふことはかんべんして下さるやうお取り計らひ願ひます、と頼んだ。

すると主婦は、まアそんな話があるのですかと大袈裟に驚いて見せて、實は店もこの不況のあほりを喰つていろ／＼苦しいこともあるので、主人も背に腹はかへられずそんなことを言ひ出したのでせうが、娘を奉公にまで出して、そのお給金をみんな廻すのだと聞けば、それでもならぬとは言はないだらうし、またあたしが言はせもしないから、その點は御安心なさるがいゝ、といふのであつた。

主婦が歸つたあと、父親は千代子の意向をたゞすと、千代子は簡単に承知した。で、父親は改めて、その主婦へ頼みこんだ。十日ほどするとやつと話がきまつたと知らせて來て、その翌朝早く主婦が迎へに來て千代子をつれて行つた。

それからまた五、六日すると、先方は千代子が非常に氣に入つて、二年分の給料を貸してくれたと、主婦は主人のゐる前でその金を父親の手に渡した。父親はその金をほんの一分間ほど握つ

て見たきりで、すぐ主人の手に渡した。主人はぶすんとして、これでは半分にも足りないが、まア歩合給料の没収といことだけは取り消さう、と言つた。

父親は、主婦と主人の前に、額を疊へすりつけてお禮を述べた。——といふのであつた。

牧山もこの話には呆れた。

「それぢや、その印刷屋の親爺とお神は、はじめつからぐるになつて、こつちを引つかけたのですね。それは立派な詐偽誘拐罪です。先づそいつらをとつちめなけりやいけない」

「だからわしは、今日さつそくあのお神に會つて、そのことをなじつたのです。ところ、お神はそつぽを向いて、てんから相手にしません。今まではおかめのやうに圓くしてゐた顔を、けふは狐のやうにとんがらして、ぶん／＼と鼻先であしらひやがるのです。その揚句が、そんなにくやしいなら、借りた金をきれいに拂つて、娘をさつさと引つ取つたらいゝだらう、とぬかしやがるのです。今頃になつてわかりましたが、ほんとのペテン師はあいつらだつたのです。さういふ奴らに向つて、わしはこの頭を疊へこすりつけてお禮を言つたのですからなア……」

父親はそこで、その灰色に禿げかけたおでこを平手でびしや／＼叩いて、

「あゝ、こんなじやがいも頭は、ちよん切つてうつちやつてしまひたい」と言つた。

五

千代子が「夜の女」として賣られてゐることに、もう疑ふ餘地がなかつた。千代子は大鰯の口の端に置かれてゐる。しかも千代子はそれを怖れることを知らずにゐる。牧山は全くひと事とは思へなくなつた。

牧山は父親に向ひ、四、五日中に金を工面して千代子を必ず取り戻してあげるからと言ひ含めて無理に落ちつかせた。そしてこの間から下讀みてしゐる或る原書を神田の方の出版社へ持ちこんだ。その翻譯の稿料を前借りして、それで千代子をつれ戻さうと計畫したのであつた。だが話は纏らなかつた。本郷の方の出版社へも話して見たが、やつぱりものにならなかつた。

彼はその方を思ひ切ると、市内から郊外までの知人友人の家や勤め先を駆けすり廻つたが、これも悉く拒絶された。彼も自身の生活のために既にその人達から借りられるだけ借りつくしてゐるので、拒絶されれば黙つて引っこむしかなかつた。

そのうちに年は暮れて正月が來た。牧山は父親を招いて型ばかりの屠蘇を出したりした。父親はこの五、六日のうちにげつそりとやつれて、一ぱいの屠蘇にも咽んでゐた。さういふ父親を見

ると牧山は、ほつて置けないのは娘の千代子ばかりではないと思つた。

翌る二日の朝、牧山は憤然とした気持ちで品川の印刷屋夫婦を訪ねて行つた。その人非人の行爲を面詰して、金を出させるか、千代子を彼等の手でつれ戻させるか、そのどつちも受けつけない場合は、腕力をふるつても目的を果してやるといふ意氣込みであつた。

が、行つて見ると、印刷屋夫婦は伊豆の方の温泉場へ出かけて、十日頃でないと歸らないだらうといふのであつた。そのかへりを待つてゐるうちに、千代子はどうなることだらう。あの父親もまたどうなることだらう。牧山は底冷えのする風がヒュー／＼と吹いてゐる灰色の街中をくゞるやうに歩いてゐるうちに、むやみに腹が立つて來た。

その夜であつた。牧山は再び横濱のその窪地の一廓へ入つて行つた。場合によつては千代子を掠奪してやらうといふつもりであつたのだ。

窪地の中は正月のせいか、この前よりはざわついてゐた。女共も新しい着物をべら／＼させて妙に浮き立つてゐた。男共は、うすぎたない聲でわめいたり唄つたり、わざとよるぼつたり、前をひろげてシャー／＼やりながら歩いたり、さういふ男共に向つて、女共はもつとあけすけなふるまひをしたり、まるで悪夢の中に見るやうな場面であつた。

牧山は、さういふ女共を蹴とばすやうなけんまくで、路次のまん中をぐん／＼歩いて、千代子のゐる店の方へ入つて行つた。彼は、もし千代子はこの前のやうに店の外でつかまへることが出來なかつたら、客として店へ入つて、その上で千代子に會ふ工風を立てようと考へてゐた。

しかし千代子にはすぐ會へた。千代子は、店の入口の壁に凭れて、ひとりぼつねんと立つてゐた。牧山ははじめは千代子とは思へなかつた。顔をまつしろに塗り、口紅をつけ、髪には大きなウエーブをかけて、途方もない大柄な着物をすらりと着てゐたからであつた。

それが千代子だと解つたとき、牧山は思はず顔がほてつた。その恰好は、店に立つて男共を呼んでゐる他の女共と少しも變らなかつたからである。彼は自分の方が恥しくなつた。

「まア牧山さん。あたし、今晚あたりいらして下さるやうな氣がしてましたわ」

千代子はそんなことを言つて傍へ寄つて來たが、牧山はしばらく黙つてさういふ千代子を見つめてから、

「千代ちゃん、その恰好どうしたの？」と言つた。

「これ？」と千代子は自分の姿を見廻して「これ、お正月だからよ」

「お正月でも、かた氣の人はそんな恰好はしないぜ」

「でもおかみさんが、これでなければいけないって言ふんですもの」

「そしてこの店の前に立つて、お客を呼び込めといふんだらう？」

「さうは言はないけど、たゞ立つてゐなさいつて」

千代子のからだは既に、野犬のやうに群がつて来る男共の前にさらされてゐるのだ。さう思つて千代子のとろりとした肩のあたりを見てゐると、わけもなくカツとするものが胸の奥から湧き上つて来た。それは、このからだこそ誰にも指一つさはらせやしないぞ、といふ一種の嫉妬に近い興奮であつた。彼は千代子の手首をしつかり握つて、

「千代ちゃん、うか／＼してゐちや駄目ぢやないか」と荒々しく言つた。

「どうしてなの？」

「どうしてぢやないよ。千代ちゃんは今……」

さう言ひかけると、入口のカーテンの蔭から一人の女が、これもまつ白に塗つた顔だけを出して、小聲に、

「千代ちゃん、そんな話、むかうの原つばへ行つてするといふわよ。こゝにはあたしが立つてあげるから」と言つた。

「ありがたう」牧山は千代子の代りに答へて先に歩き出した。千代子はフェルトの草履をボンボンさせながらついて来た。

原つばとは、この前の夜千代子と立ち話をした空地のことであつた。その中のうす暗の中へ入ると、牧山はつゞきを言つた。

「ね、千代ちゃんは今、あの女共と同じやうなつとめをさせられようとしてゐるのだぜ。それがわからなくつや仕様がなないぢやないか」

「うそ。そんなことないの。おかみさんだつて、千代ちゃんは別なんだからと言つてるのですもの」

「おかみさんの言ふことなんぞあてにはならないよ。その證據に千代ちゃんはそんな恰好をさせられて、立派なおとりに使はれてゐるぢやないか」

「え、そのおとりの、それだけなのよ」

千代子はきよとりしてそれを言つた。牧山はぢり／＼しながら、

「おとりになつたといふことは、もうすぐ本物に使はれることなんだよ。今の千代ちゃんは、大きな鰐の口のはたに置かれてゐるやうなものだよ」

「さうか知ら。あのねえさんもそんなことを言ふのですけど」

「ねえさんとは？」

「今、カーテンの中から顔を出した人。あの人はね、千代ちゃんは今、大波に吞まれかけてるのだつて言ふの。だから、いたましくつて見てゐられないつて言ふの。それから、いつそのこと今のうちに逃げたらどう、つて言ふのよ」

「さうだ。その人の言ふ通りだ」と牧山はうなづいて見せて「それでも千代ちゃんは大丈夫？ しつかりと身を守つて行ける？」

牧山は恐い顔をしてそれを言つた。

「ええ」

千代子は痛さうな顔をした。

「もしおかみさんから、あの女共と同じやうなつとめをしると言はれたらどうする？」

「そしたら死んぢやうの」

「人間、さう簡単に死ぬるものぢやないよ？」

「さうか知ら」

●そんなことを言つてゐる千代子の顔は、相變らず無邪氣だつた。牧山にはいよ／＼頼りなく危なかく見えて來た。

こゝで牧山は、このまゝ千代子を外へ連れ出してまはうかと考へた。つまりこゝへ來る時に計畫した「掠奪」を、思ひ切つてこゝで實行してやらうかと思つた。さう思ふと、何だかからだが顫へて來た。彼は煙草に火をつけてそれをゆつくり喫ひながら、氣持ちを落ちつけようとつとめた。

そこへ背後に人の聲がして、それが近づいて來たなと思ふと、

「野郎、動くな！」と息張つた聲がした。

ふり向いて見ると、いが栗頭の肩の突つ張つた男が、もぢりを着て立つてゐた。小男であつたが山猫みたいな目つきをしてゐた。それが牧山の前へつか／＼と寄つて來て何か言つたかと思ふと、かためた右拳をカツと突き出した。瞬間、牧山はくらく／＼となつてそのまゝ地べたへ昏倒してしまつた。

千代子が何か叫んでゐるのを牧山はかすかにきいてゐたが、それもすぐきこえなくなつた。

さて、それから十日ほどした夜、千代子の父親が何か酒に酔つたやうになつて、牧山の部屋へ入つて来た。

牧山は水枕をして寝てゐた。千代子を掠奪しようとして、山猫のやうな男に叩きのめされた後、牧山は意識を取り戻すと（その時は千代子の姿もその男の影も見えなかつた）辛うじて家へ歸つて来たのだが、その夜から發熱したのだ。そしてはじめ二日ほどは昏々と眠りつゞけ、三日目から少しは起き上れるやうになりながら、まだすつかり立ち上れるまでにはならなかつた。その間、父親は、日に一度づゝ例のげつそりとした顔を見せて見舞つてくれたが、牧山はたゞ風邪をこぢらしたので言つて、その夜の事件はおくびにも出さなかつたのである。

牧山はさうして寝ながら、その夜の事件が千代子の身にどう影響したであらうと考へると氣が氣でなかつた。思ひ切つて事件のいきさつを父親に話して、その父親に千代子掠奪を試みさせようかとも思つたが、それはどこから考へても無謀であつた。第一父親はその話を聞いただけで氣が轉倒しさうに思はれた。——迷つてゐるうちに父親は顔を見せなくなつた。顔を見せないばかりか

りか夜になつても家へ歸らない日が二日もつゞいた。そのあとへ父親はその酔ひどれのやうな姿をひよつこり運んで来たのである。

牧山は床の上に起き上つた。

「どうしたんです。何か起つたんですか？」

父親はそれには答へずに、白布に包んだ四角な箱を、牧山の前へ捧げるやうに出して、だしぬけに、わア……と泣き出した。まるで子供のやうに泣き出した。

牧山があつけに取られてゐると、父親は泣きながら、

「牧山さん、娘は死にました。娘はこんなになつてしまひました」と言つた。

牧山は父親の顔をぎろりと見つめたきり身動きも出来なくなつた。父親は、さういふ彼をゆるぶるやうにして、

「牧山さん、娘は死んだのですよ。娘はこの中に入つてゐるのですよ。一體これは……一體これは……」あとは全くの酔ひどれのやうに呂律が廻らなくなつた。

牧山は前に置かれた白布の包みをほどいて見た。白木の箱が出て来た。その蓋を取つて見た。黒い壺が入つてゐた。その蓋は取らなかつたが、牧山は夢でよくこんな所を見るものだ、などと

思ひながらぼんやりとしてしまった。

父親はしばらくうなづいてゐた。それからはずきりと連絡しない言葉を繼ぎ足しく言つた。

「娘は死にました。急性の肺炎だとお神めは吐かしたですが……自殺したのぢやないか。いや、あの娘がそんなことをするものか。……それはさうに違ひないが……つまりは娘は殺されたのです。娘は、かんきん同様にされた。店のお神めが看守だ。それから馬のやうな男のそばに寝かされようとした。……娘はびつくりして、お神にむしやぶりついた。お神はこんどは、娘の手足に鎖をつけた。いやそんなことはしないといふ。馬鹿言へ、それと同じやうなことをしたのだ。……そして娘をまた、かんきんした……」

父親は、フ、フ、と笑ふやうな聲を出した。

「……それに間違ひはありません。あの店の女から聞いたのですから間違ひはありません。その女は娘を妹のやうに可愛がつてゐたのですよ。……それがわしの所へ電報を打つてくれました。わしは夢中で飛び出しました。途中まで行つて気がついた。あゝ牧山さんとこへ知らせるのを忘れたと気がついた。しかしもう引つ返しちやゐられない。……行つて見ると娘は瀬戸物のやうな白い顔をして寝てゐた。昨日の晩寝たきりまだ眼が覺めないのですよ、お神はしやア／＼してゐる

やがつた。……わしは娘を呼びました。けれど牧山さん、娘はわしがどれほど呼んでも、どれほど聲をかけても、返事一つしないので、それつきり……それつきり息を引き取つてしまつたのですわい。……あゝしかし牧山さん、これでいゝものでせうか。これが浮世といふものでせうか。……なるほどわし達はこの世には何の役にも立たない人間でございますが、その代りまた何の邪魔もしなかつたつもりですよ。……黙つて働らいて黙つて生きて來たのですよ。あの娘などは、そこらに生えた草のやうに一人で黙つて育つて來たのですよ。それを、あんな地獄へつれ込んで、あげくがあのやうな目にあはせるとは、こりやどういふことでせうか」

父親は牧山の顔をまぢ／＼と見詰めた。目がしよぼ／＼となり、頬の皺がびく／＼して、またわつと泣き出しさうになつたかと思ふと、今度はほんとうにア／＼／＼と息が抜けたやうな聲で笑ひ出した。

「あゝ、こりやまるで嘘のやうな話ですわい。夢のやうな話ですわい。この世にこんな馬鹿な話があつてたまるものですか。……あの娘が骨になつてこんな壺の中に入つてゐるなぞと、そんな途方もない話がありますかい。あの娘とこの壺と何のかゝはりがありませんかい。……あゝわしは、とんだ夢を見てゐる……」

北海流人

一

——雪子は、その「地獄」から脱走しようとしてその途中、折からの猛烈な吹雪に叩きつけられ、危ふく凍死しようとした。さういふ北見自身もその雪子を扶けて歩きながら意識を失ひかけた。それが助つたのはむしろ奇蹟だつたといつていい。しかし若しその時二人が凍死してゐたら、簡単に心中者の名で呼ばれて、一切の責任は二人が背負はされたであらう。

事はその二年前から起る。

當時雪子は山ノ手のあるデパートへ勤めてゐたが、際立つた美人でもなく、新時代の女らしい感覚を持つてゐるのでもなく、至極單純な子供のやうにあどけない娘だつた。だから北見もこの

女のどこに惹かれるといふこともなく、謂はゞ漫然と會つてゐたのであつた。がその會ふ度數が重なり、他愛もない接吻などをしてゐるうち妙に離れ難くなり、つひそのまゝ自分のアパートへ連れて来て同棲してしまつたのであつた。雪子はその少し前、身内としてたつた一人残つてゐた繼母を失くしてから——一人の兄がゐるがそれは滿洲へ渡つてゐたので——全くの孤獨生活をしてゐた。だから、さういふことをするにも至つて簡便だつたのだ。

ところで北見はその當時も例の如く無定職無定收だつた。で、その同棲は雪子の僅かの定収入を狙つた打算のものに思はれやしないかと小心な彼は氣づかつたが、單純な雪子だけにそんなことは天から考へなかつた。雪子はたゞ二人の同棲生活を喜んでゐるばかりだつた。だから二人は、生活は不如意ながらもまるで小鳥の巢にこもつたやうな和やかな毎を送るやうになつた。

狭いアパートの部屋はまたそれに逃へ向きだつた。餘計な隙間はどこにもない。その場所もだれにも知らしてゐないので餘計な人間の出入りもない。朝、雪子が勤めへ出て行くと、彼はその部屋にひっそりともつて「二人の巢」をあたゝめてゐる。夕方雪子は勤めから歸り風呂へ行つて來ると、月見草の花のやうに明るく開いた顔をその巢の中にぼつかりと浮べる。彼はそれを飽かず眺める。雪子はうつとりとした眼を向けたまゝふんわりと彼の胸へもたれて來る——といふ

風だつた。

けれど雪子のこのやうな性質は、一方からいへばどこまでも消極的で受身だといふ事なので、事實それが何事にも現はれ、どうかすると打つても叩いてもで響かないやうな鈍感さを露すことがあつた。それくらゐだからもちろんどんな場合でも、向うから働きかけて来て、彼の心を動かすやうなことは殆んどなく、時に彼が内心である氣持を欲求したりしても、すぐそれに應へてその氣持を見せるやうなことも出来ず、まして彼が無意識にある氣持の不足を感じてゐる場合、すぐそれを感じ取つてその不足を充たすといふやうなことは全くなかつた。で、これには彼もひとりぢり／＼し、時には癩癩を起して怒鳴り出すやうなこともあつたが、そんな時雪子はたゞ泣いてあやまるばかりなのだ。だからそれでは喧嘩にもならず、結局はさういふ雪子がかへつて可哀さうになり、今度はこつちからあやまつてなだめすかすといふことになるのが落ちだつた。

雪子はさういふ女だけに、彼がたゞ素直にしてゐさへすれば、いつか知らぬ間に一種の陶醉状態へ彼を惹き込んで行くやうな魅力を持つてゐた。目に見えぬ不思議な麻醉液をたえずその身から發散してゐるやうに思はれた。彼の氣持ははじめはそれを可なり強く反撥してゐたが、いつかした時にそれにぶつかつたのであつた。

同棲などをしてゐる若い者の間によくあることゝはいへ、陰にこもるそのこもり方は少々ひどかつたのだ。同棲して三月もすると、夜は月見草の花のやうに明るく開く雪子の顔も、朝になるとその花がしぼんだやうにカサ／＼に乾いた生氣のない顔になつた。更らに半年もすると、かうも變るものかと驚くほど夜の顔と朝の顔が違つてゐた。顔ばかりでなくその眼もその唇も、からだ全體の筋肉までも、生氣と弾力をすつかり失つてゐた。だから、朝になるとあゝいけないと思ふ。が、不思議なことにこの女は、夜が來るとあの月見草がまた新らしく活々とした花をつけるやうに、ほのかに明るく生氣づいて來る。それを見るとそれまでぐつたりしてゐた彼の心臓も俄かに躍動しはじめるといふ調子であつた。

一體これはお互ひの自制が足りないからつゝいさうなるのか、さういふ女だから自制が出来なくなるのか、何にしてもこの兩方が相互に作用し合つて、ますます二人の生氣を奪ひ取るのを、二人はどうすることも出来ずに別の心でぼんやり傍觀してゐるといふ實に不可解な有様となつ

た。それは謂はゞ一種の夢遊状態であつた。またさういふ状態の中で見る雪子の夜の顔は、まつ毛の長い眼までが妙にとろんとうるんで来て、何か朧ぶるひするやうな美しさを感じさせた。彼はそれをうつら／＼とした気持ちでいつまでも眺め味つてゐた。

さうして二人は毎日の生活が何となく退儀になつて来た。

そこへ持つて来ても一つの悪い條件が加つた。といふのは、雪子が勤め先のデパートから「くび」にされたことだつた。雪子は毎朝、そのやつれた乾いた顔を、念の入つたお化粧でごまかして出かけてゐたのだが、さういふことには恐いやうな敏感な眼を持つてゐる朋輩が、それを見のがすはづがなかつた。第一番にその眼の艶がなくなつて白つぽく濁つて来たのを見た。それからお化粧に隠されてゐる顔の肌荒れを見、處女性を失つた肩つきや胸の張り具合を見た。それで面と向つて露骨な皮肉をいふものも出て来、果ては雪子はあんなあどけない風を見せてゐてその實もの凄く不良なのだ、といふことにされてしまつたのだ。雪子はその主任から特に可愛がられてゐたので、それに對する嫉妬から出た悪口雑言も加つてゐたらしいが、とにかくさうなるとその主任は、雪子へ好意を寄せてゐただけに、公然と辯解する勇氣が出なかつたのだらうか、大勢に動かされるまゝ雪子を齧くはにしてしまつたのだ。

僅かばかり貰つた手當はすぐ消えた。二人は無暗に世の中が味氣なくなつた。「小鳥の巢」はいつか「眞暗な洞窟」と變つてゐた。しかもそれを打開する方策を立てることも考へられず、くさり切つた顔と顔をぼんやり向き合してゐたが、つひにそれに堪へられなくなつたある夜、彼は半ば冗談のやうに、

「おい雪子、二人で心中する氣はないか」といつて見た。すると雪子は笑ひもせず、

「え、あたしも今、それを考へてゐたの」といふ。彼はそれにはヒヤツとしたが、

「ちや死なうか、どういふ死に方がいゝかな」といつて見ると、雪子は彼の膝へ凭れ、例のとろんとした眼で、

「かうして二人が一つになつたまゝ眠るやうに死にたい」と答へる。

「よし、それちや何かさういふ薬を買つて来よう」といふことになつたが、その實彼等にはその薬を買ふほどの金もなかつたのだ。そこで彼は、

「あゝ、おれ達は死ぬことも出来ないのか」と溜息をついて阿呆のやうに笑つて、それきり二人共黙つてしまつたのであつた。薬が買へないのなら外の死に方を選ばうとはしなかつたところ、二人はそれほど深刻に死を希つてゐたのではないとも言へるが、もしあの時それだけの金があつ

たなら或ひはわけなく死んだかも知れなかつたのだ。

「あの時死んでゐたら極楽だつたわ」

後で雪子はさう言つたが、ほんとうにさうかも知れなかつた。

二

さて二人は、この死ぬことも生きることも出来ないやうな惨めな最後の一线に追ひ込められて間もなく、北見は東京に、雪子は北海道へ出かけて當分別々の生活を立てることになつた。それが二人を内からも外からも救ふ唯一の方法だつたのだ。

しかし今話した通り二人の關係は病的になつてゐただけに、互ひに冷靜に話し合つた上でさういふ手段を選ぶといふやうなことは全然出来なかつた。心中しそびれた二人は、その「眞暗な洞窟」の中に幾日かちつともつてゐるうち、そこに湧き上る一種の毒氣のために窒息しさうになつたのだ。がしかしさういふ中にちつとしてゐることは人間の本能が承知しない。二人はもう理屈なしにこの中から飛び出さずにはゐられなくなつた。ところへその前から頼んで置いた雪子の就職が極つたのだ。所は函館だ。そこに雪子の女學校時代の友達——雪子の故郷は室蘭で、そこ

で女學校二年まで通つたといふ——その時代の友達が函館のあるデパートへ勤めてゐて、雪子を同じ店へ世話してくれたのだ。手紙の中には雪子の旅費まで入つてゐた。これは洞窟の内へ突然射し込んで来た天上の光であつた。雪子は取るものも取りあへず即日函館へ發つてしまつた。それこそは實際本能的の仕業だつた。

一人になつた時北見は心からホツとした。雪子もさうだつたといふ。

それから一年ばかりのことに就ては特に言ふほどのものもない。彼は何よりも先づ自分の生活を建て直すつもりだつたが、結局七轉八倒するばかりだつた。で半年ばかりで東京を思ひ切り、ある知人を頼つて仙臺へ出かけ、ある役所の臨時雇ひに入つた。そこで三月ほど辛抱したがそれも喰ふや喰はずなので、更らに青森まで踏み出した。西へは行かうとせず北へ北へと上つて行つたところは、我ながらいちぢりしかつた。雪子と別れてホツとしたなどはほんの一時で、この頃の彼は少し思ひつめると涙が出さうになつてゐたのだ。

青森ではある新聞社の廣告部の使ひ走りのやうなことをした。しかしこゝまで来れば、函館は呼べば應へるやうな所にあるのだ。よし、よりましな仕事にありついたらとしても、いつまでちつとしてゐられるものではなかつた。そのうち一方では寒風が吹き出し粉雪が降り出すといふ始末

で、もう矢も楯もたまらなくなり、たうとうあの連絡船へ乗つてしまつたのだ。二人が別れてざつと一年目、去年の十二月上旬のある夜のことである。

彼は今迄、こんど二人が會ふ時は僕自身の生活を何とか建て直して雪子を東京へ呼び寄せる時だと、よく手紙で言つてやつてゐただけに、この海峡越えを一方ではするふんなさけない氣がしてゐた。だから、その日函館へ渡るなどといふことは勿論、青森まで来てゐることすらも雪子へは知らしてゐなかつた。

海峡では吹雪いてゐた。船は何かゴト／＼とつぶやくやうな音を立てながら退儀さうに揺れつづけたが、それでも時間通り函館の港へ近づいて行つた。彼は甲板へ出て見た。吹雪はいつか止んで凄いやうな青い月が中天に懸つてゐる。彼は刺すやうな寒風を冒して船首の方へ歩みいで、はるか港の灯を見やつた。十年前中學を出た年、彼は一度札幌まで来たことがあつたが、その時の函館は晝だつたのでひどい殺風景な港街といふ印象きり残つてゐなかつた。が、その夜の感じはがらりと變つてゐた。いかに夜とはいへこんな美しい港だつたかと眼を睜つた。あの臥牛山の麓から段々の層をなして輝いてゐる灯は、更らに左手へ長く遠く裾を引いてすばらしく華やかに活々とひろがつてゐる。そしてあゝあそこに雪子がゐるのだな、この一年間に見違へるほど

健康になり美しくなつたに違ひない雪子がゐるのだな、と思ふと、華やかに輝き渡つてゐる灯の街までが彼を迎へるために盛装してゐるかのやうに見え、彼はやつぱり来てよかつたと思つた。青森を發つ時のなさけない思ひもいつかどつかへけし飛んでゐた。雪子はだしぬけの僕の姿を見てわつと泣き出すことだらうなどと思ひ、彼はひとりホロリとしたりした。

船は岸壁へ着いた。彼はたつた一つの荷物である角々のすり切れたスーツケースを提げて船を降りると、ざわついてゐる待合室の人混みを押し分けて外へ出た。そこから二目散に雪子のそばへ飛んで行くつもりだつた。

ところがいろんな邪魔ものが次々と現はれた。待合室を出た所にはてんでに提灯を持った宿の客引きがずらりと並んでゐて、北見のみすばらしい身なりをチロ／＼と痛いほど見る。しかもそれへうつかり眼をくれたら、わつと飛びついて來さうなのだ。しかしそんなのはいゝとして、驛前の廣場まで出て行くと、一人の宿引ともぼんびきともつかぬ男がしつこくついて來てねち／＼と絡みかゝつて來た。彼は怒鳴りつけてやつとそれを追つ拂つたが、しばらく行くと、今度は黒いかくまきを頭からかぶつた女が眞白に塗つた顔をにたつかせながら言ひ寄つて來た。サーピスつきで宿賃よりも安いといふことを繰り返しては行く手を遮る。彼は先へ出るためには腕づくで

その女の胸倉を押し除けねばならなかつた。さうしてまた二、三丁も行くところにはまた遊廓の前へつき當つてしまつた。牛太郎が飛び出して来て彼のスーツケースをひつたくらうとする。彼はむしろ呆れた。身なりを見てもふところ加減が解るはずだ、解つてゐながらさうするのだとすれば、さつき船の甲板からはかるに眺めて喜んだこの華やかに活々と輝き渡つてゐる街の灯も、實は、一片の肉をも見逃がさうとはしない、無数の飢ゑた狼群の眼だつたのかと思はずにはゐられなくなり、この街全體が盛装を凝らして自分を迎へてゐるかに感じた一人よがりには、思はず苦笑してしまつた。

彼は腹立たしくもなり慌て氣味にもなり、何かに蹴つまづいたりしてあたふたと元來の方へ引き返した。すると不意に眼の前へ立ち塞がり「やア」と言ひかけたものがあつた。またかと思ひ睨みつけるやうに見ると、それは船の三等室でとなり同志に坐り、少しばかり世間ばなしをし合つた男であつた。

彼は不機嫌な顔を向けて黙つてゐた。けれどその男はニコニコ笑ひながら、

「まだ行先がきまらないんですか。いつまでうろついてゐると名物の熊が出て来てさらつて行きますぜ」と言つた。彼はそつぽを向いて、實はこれ／＼の所へ行かうとして、道に迷つてゐるの

だ、と答へると、

「そこなら僕の行く道筋ですからついでなさいよ」とその男は先に立つて歩き出した。三五、六の、チヨボ髯をはやし金縁の眼鏡をかけ半ズボンをはいた、ちよつとえたいの知れない風態の男だが、いかにも人が好ささうだし、恐れるほどの人間でもあるまいと思つたので、まアついて行つて見てやれといふ氣で歩き出した。といつて話をしかけるほどの餘裕も持てず、怒つてもゐるやうに黙りこくつて歩いてゐると、相手はそんなことは氣にも止めず、太い脚で大股に歩きながらひとりで話し出した。

「この街もこの春の大火以來、がらりと容子が變つちやつてね。何しろ山ノ手の住宅地と商店街を少しばかり残して、後はきれいに焼いちまつた上、三千人からの死傷者を出したといふ騒ぎだつたからね。東京の大震災と較べりや小さいものだらうが、街の割合からいつたらこつちの方がでかい負傷だつたらうぜ。だからごらんなさい。それから小一年にもならうといふのに、この表通りだけ、こんなケチなバラック店が並んだばかりで、一重裏はまだ焼野原だ。狐や熊が出没し出したのも無理アないさ」

そこでその男はひとりで、あつはゝと笑つて、

「いや全くの話ですよ。この街の至るところにその狐や熊共が出没して、男が来れば男を、女が来れば女を、その場から飛んだ所へ引きずり込んちやうといふ有様なんだ。だからこの街に不案内な者アうつかり歩けたもんぢやないんだ。あんたも船を降りてからそのけもの共に出會つたでせうが……」とその男は今度は笑ひもせず彼の顔を覗きこんだ。彼はなるほどとは思つたがそんなことにいち／＼合槌を打つてもゐられなかつた。

まもなく左手に暗い横丁が現はれると、その男は立ち止つて、

「あんたのたづねる所はこの横丁です。僕はこゝで失敬しますから氣をつけていらつしやい」とそれだけは改つて叮嚀に言つた。

彼は帽子を取つて禮を言つて、その横丁へ入つて行つた。

三

雪子のゐる家はすぐわかつた。雪子は古靴屋の二階に間借りをしてゐたのだ。暗い通りに面した二間間口の、バラツクより少しましな店構へであつた。表の硝子戸はもう閉め切り、内から白いカーテンを下し灯も消してゐる。彼は裏へ廻らうとしたがその入口がわからないので、表の硝

子戸を叩いて聲をかけた。それを四、五度やつたが何の返事もない。彼は後ずさりして往來のまゝ中へ立ち、屋根看板の上に見える二階の窓へ、雪子、雪子……と呼びかけた。やがて階下に登音がした。雪子だと思ひまた硝子戸の前へ寄つて行くと、カーテンがふわりと持ち上つて、その下から白髪頭の眼のくぼんだ老爺がぬうツとあらはれた。それが意地々々した聲で、

「何の用かね！」

彼はいやな爺々だと思ひながら、

「……雪子をたづねて来たものだが」と答へた。すると老爺は軒燈に照し出された彼の姿をチラ／＼と見て、お前さんは何者かと訊く。雪子の亭主だといふと、雪ちやんに亭主があるとは聞いたことがない。でたらめをぬかして人の安眠を邪魔するとは何ごとだ、と言ひ立てた。彼はむか／＼して来た、が我慢して、さういふ怪しい者ではないわけを一通り話したが、老爺は手を振つて、

「駄目々々、本人が留守なんだからはなしにならねえ。まア歸つたらゆつくり聞いたげようよ」とまたふわりとカーテンの中へ消えてしまつた。

彼はいよ／＼本氣に腹が立つて来た。彼は硝子戸を睨めつけて、あの爺々も「名物の熊」の一

人だらうなどと思つた。けれど、そこでは喧嘩にもならないので、また往來の中へ出てぼんやり
 いた。

寒い。さうしてちつと立つてゐると、寒氣が耳たぶをちぎりさうにし、頭の中までもしん／＼
 と浸みて來る、彼はスツケースを地べたへ置いてそこらを往つたり來たりしはじめた。さうし
 て三十分もしたらうか。もう泣きさうになつてゐるところへ、やつと雪子らしい女の姿が見えて
 來た。一人のつれがあつたが、それは黒の長い外套を着、この街では珍らしい洋装だ。あれが雪
 子をデパートへ世話してくれた友達なのかも知れぬと思ひながら、彼は凍えた足を引きすつてそ
 の方へ歩み寄つて行つた。と、その洋装の女が雪子であつたのだ。五、六歩隔てゝ向き合つたま
 ま双方ともちよつと聲が出なかつた。その間に一方の女はさよならと言つて行き過ぎた。

「……まア……まア！」やがて雪子はたゞさう言つた。それは、彼を見ておどろき喜ぶといふよ
 りは、おどろいてそして慌てゝゐるといふ調子であつた。彼はそれがちよつと胸につかへたが、
 そばへ寄つて手を握つて、

「だしぬけにおどかして悪かつたが、たうとう來ちやつたよ」と息を弾ました。

「何だか夢のやうだね。この頃ちつとも便りがないし、どうしたのかと心配してたの」

「それも悪かつた。とにかくもう凍えさうだから、早く部屋へつれてつてくれ」

雪子はそのまゝ何か迷ふ風にしてから急に歩き出し、靴屋の一軒置いた隣の横手の木戸を開
 けて彼を誘ひ入れた。けれど裏の臺所口の所で雪子は彼をそこへ立たしといひ一人先へ上り、中
 で何かひそ／＼話してゐる。またあの老爺が出來るのかと思つてゐると、

「おはいんなさい」と雪子は赤の他人を呼ぶやうな空々しさで彼を呼んで、とつと二階へ上つ
 て行つた。

彼は靴を脱ぎスツケースを提げて段々を登つて行つた。雪子は切り爐の端に立て膝に坐つて
 火をかき立てゝゐた。彼はその肩へ手をやつた。その夜の雪子は、はじめつから雪子らしくない
 が、さうして外套などを着てゐる姿は尙更ら雪子らしくないのを我慢しながら手に力を入れ、そ
 の肩を引き寄せると、雪子はへんに白っぽい顔を向けてその唇を持つて來た。しかしそれはまた
 實に空々しく冷たい唇であつた。彼はすぐそれを押しつけて爐端へ坐り、煙草に火をつけて部屋
 の中を見廻した。眞赤な布團をかけた炬燵やぐらが置いてある。玉蟲色の洋服が壁にかゝつてゐ
 る。本箱兼茶箆筒には、僅かばかりの古雑誌と瀬戸物の外に、映畫俳優のプロマイドや西洋人形
 が飾つてある。その上には安つばい三色刷の裸體畫を入れた額がぶら下つてゐる。それはどう見

でもデパートへ勤めてつゝましやかな生活をしてゐる女の部屋とは受け取れなかつた。彼は改めて雪子の顔を見た。東京でデパートへ勤めてゐた時分もあゝいふ理由で相當念の入つた化粧をしてゐたが、今のそれはまるで砥粉をなすつた泥人形の首であつた。夜だけは不思議と活々したあの顔の面影などはどこにも残つてゐなかつた。船を降りてこゝへ來るまで碌なことがないと思つたら、やつぱりこんなことだつたのか、と彼は腹の底で嘆息した。

「ねえ！」と雪子は彼の氣をはぐらかすやうに「お酒あげませうか」と言つた。

「酒などまで置いとくのかい？」

「……う、うん」と雪子はどきまぎして、

「飲むなら買つて來ますから」

「いらないよ」

「ちや何かあつたかいものでも……、何がよくつて？」

「なんにもいらんよ」

「まア意地わる。なんか言つてよ」

「ばかッ！」

彼の平手がいきなり雪子の頬へ飛んだ。船を上つてからの腹立しさがたうとう爆發したのだ。雪子の顔はひどく歪み、今にもわつと來さうになつたが、それを無理にうす笑ひにして、

「ごめんなさいね」

「あやまれといつてるんぢやない。貴様は今何をしてゐるのかそれをはつきり言へ！」

「……………」

「こんな夜更けまで何處へ行つてやがつたんだ、それを言へ！」

「……………」

「そのなりは何だ。そのつらは何だ。この部屋のさまは何だ！」

「……あとで言ひますから……いまは訊かないでよ」

彼は腕を組み、はア／＼と息を吹いてゐたが、

「ちや訊かないよ。訊きたかアないよ。とにくだしぬけに來たのが悪かつたんだ。いや、函館くんだりまでのこゝやつて來たおれが大馬鹿だつたんだ」

立ち上りスーツケースを取り上げようとすると、雪子は黙つて飛びついて來た。そしてむやみにむしやぶりついた。やがていかにもくやしさうに泣き出した。——結局彼はもう一度坐ること

になつた。雪子は咽びながら言ふ。みんなわたしが悪いのだ、わたしが馬鹿なのだ、けれどあなたを思ふわたしの心に變りはない、この二ヶ月ばかりあなたから何の便りもないので、どんなに心配してゐたことか、といふやうなことを言ふ。彼が一人で憤慨してゐる問題に就ては辯解しようとしないうち、雪子は彼が想つてゐる以上のどん底へ墮ちてゐるのかも知れない、と思ふと彼はその事に觸れて行くのがおそろしくなつた。といつて勝手にそれを想像してゐると際限なく不愉快な事件へ擴がつて行く。

「いつたい、いつデパートをやめたんだ」

「……デパートへははじめつから出なかつたんです」

「なに？」

「あのお友達はあたしを欺したんです。デパートへ世話するといふのは嘘だつたのよ」

そんな馬鹿な話があるものかといつても後の祭だつた。一年前その女が御親切にも旅費まで封入してデパートへ世話するといつて來たとき、少し考へて見れば今どきそんなうまい話が有りようはずがないことは解つたのだ。それが解らなかつたといふことが、場合が場合とはいへ、そも／＼の間違ひだつたのだ。

「それでどうしたのだ？」

「だからそれもあとで話しますわ。今はとても……」

「大てい見當がつくよ」

「後生だからそんなこと言はないで」

「その友達といふのはさつき一緒に來た女か？」

「違ふ。そのお友達はいま行衛不明なの」

「さうか。お前も少しでさうなるところだつたんだね。……しかし女も墮落するとそんなにまでなるものかね」

「墮落……？ 墮落ぢやないわ。こんな墮落つてないわ」

「墮落でなけりや何だ」

「あなたにはわからない。あたしの身になつて見なけりやとてもわからない。死ぬつもりなら、そりや……」と雪子はそこで階下へ聞き耳を立て、小聲になり「もう寝ませう」

彼はそれがまた癪にさわり、

「下の爺さんはありや何だ」とわざと大きな聲を出した。

雪子はキラリと鋭く彼を見据ゑ、

「ねえもう寝ませうよ」と今度は少し甘つたれるやうに言つた。そんな所も一年前のあの單純で鈍感だつた雪子とは別人のやうだつた。

その夜の雪子は、どつかプロステチュートのやうなところがあつた。雪子は彼の耳元で、近頃わたしはあなたから便りがあり次第、この街から逃げ出さうと考へてゐた、毎日毎夜そればかり考へてゐた、そこへちやうどあなたが来たのは神様があたしの願ひをきいてくれたのだ、だから明日か明後日のうち、わたしはいろんなきまりをつけてこの街を出るやうにする、こんな怖ろしい街へはもう二度と来ない、二人でもう一度東京へ出よう、でなければ兄を頼つて滿洲まで行かうといふやうなことを言ひつゞけた。けれども彼には只空々しく、少しも身にしみるものがなかつた。

彼は、雪子の謂ふ「怖ろしい街」といふのを、彼がその夜の目にふれた街の印象を因として、さまざまに想像して見た。あの宿引ともぼんびきともつかぬねち／＼した男、かくまきをかぶつてにた／＼と言ひ寄つて来た女、彼をゆすりか泥棒のやうに扱つたこの家の老爺、それからあのチヨボ髯を生やしたえたいの知れない男が話した「狐」や「熊」——さういふことを一つ一つ思

ひ出し、それらをこの雪子の背景人物に置いて見て、雪子がかういふ女になるまでの過程をつくり上げて見た。それはまたぢり／＼するほど不愉快なものであつた。

轉々としてゐるうちに階下の柱時計が五時を打つた。雪子は蒼白な顔をしてくつたりと眠つてゐた。

四

しかしそれから幾日もしないで、北見は浮浪者のやうな姿となつて、吹雪の街の中をうろついてゐた。

雪子と一夜を過ぎた夜、彼は明け方になつてやつと眠りつき、十時過ぎた頃眼を覺して見ると雪子はもうゐなかつたのだ。彼はすぐにハツと胸に感ずるものがあつたが、さうなるとかへつて雪子はこの街を出るためのきまりをつけるために出かけたのだらうといふ氣休めの考へも出て、ちり／＼しながらもその日一日と翌日一日を待ち暮した。けれど今日になつてはさすがに我慢しきれなくなつた。階下の老爺に雪子が働いてゐる場所を訊いて見たが、てんで相手にしないばかりか、雪子が留守なのに亭主づらをしていつまでとぐるを巻いてゐられちや物騒でならぬ、とい

ふやうなことをづけ／＼といふ。雪子が出て行つた朝、枕許に置いてあつた僅かの金はもう使ひ果してゐたし、彼は最早ゐるにもゐたゞまれず飛び出したのであつた。

吹雪は時にはそこら一面を煙幕のやうにもう／＼と煙らした。時には旋風のやうに渦巻きながらつつ走つた。時には海嘯のやうな勢ひで押し寄せて來た。彼はその度に電柱の下にイんだり、人の家の軒下へ走り込んだりしてそれをやり過しては歩いた。道行く人はすべて異國人のやうに見えた。電柱もポストも街燈柱もみんな背を向けてゐるやうに見えた。街並の店々はおよそつれない面を向け、この街名物の悪道路は至るところに陥穿をつくつてゐる。彼はどうにでもなれといふ氣持ちで歩いてゐた。

海岸通りへ出た。そこにはコンクリートや石造の倉庫がずらりと並び、それらこそ實に冷酷な面を向けてゐた。鱈の生臭い匂ひがぶん／＼と流れ、凸凹の石敷道ががち／＼になつて續いてゐる。海上には大小無数の船がみんな眞黒に煤けたまゝ、吹雪の中に凍死したかのやうにちつとしてゐる。はるか沖には幾つかの荷物船が赤錆びた胴體を何かの死骸のやうに横たへてゐる。すべて悪夢の中の光景のやうに重苦しい。見てゐるうちにそこから來る壓迫がさつきのようにでもなれといふ彼の氣持ちをも壓倒しさうになつた。彼はありつたけの力でそれへ又向つて行くやう

な氣構へもして見た。あらゆる惡口で罵つて見る氣にもなつた。雪子をあのやうにして奪ひ去つた上、おれをこんななまで叩きつけたのもこいつらの仕業だと怒鳴りつける氣にもなつて見た。しかしそんな氣持ちは顔にも現はれない先に、胸の中で凍つてしまつた。

彼は倉庫の軒下へぼんやりイんでゐた。

一つの通船が、凍死してゐるやうな船の間を縫つて來る。それが岸壁につくと中から七、八人の男が上つて來た。みんな縫のやうな外套にくるまり兩手を顎の下に組んで黙々とやつて來る。

その中の一人が白い齒を出して笑ひながら彼の前へ寄つて來て、大きな聲で言ひかけた。

「やア大將、どうしたい」

その聲でわかつた。それほど人相も風態も變つてゐた。それは先夜彼の先に立つて道案内をしながら「狐」と「熊」の話をした男であつた。金縁の眼鏡も、チョボ髯もなくなり、たゞ顎一ぱいにザラ／＼の赤髯を生やしてゐる。オーバの代りに袖も裾もすりきれたもちりを着てゐる。といふ變りやうで、こつちからも「大將どうしたい」と言ひたいほどだつた。が、そんな調子が北見の方から出ようはずはない。彼はたゞあゝ助つたと思ひ、今こそほんとうに救はれたといふ氣持ちで、もう泣きさうになつた顔を突き出したばかりであつた。するとその男は彼の肩をポンと

叩いて、
「まあいゝさ、お互ひさ、世の中は三日見ぬ間さ」といふやうなことを言つて、「一緒においでよ」と歩き出した。

「ついて行つてもいいですか？」彼はその後からおづ／＼と問ひかけた。

「いゝも悪いもないさ。かうして歩いてゐるうちにや棒に當るよ。何より禁物はショゲることだ。ヒカンするのが一番いけねえ。世の中にや棄てる神もありや助ける神もあるてえわけさ」とその男は萬事こつちのことは呑み込んでゐるといふ調子だ。それから半丁ほど先を行く仲間の方を顎で指して、

「あゝなつちやおしまひだからね」と自分はある仲間ではないやうな事を言つた。北見は朝から大事に喫つてゐたバツトを取り出し、その男にも一本やつた。彼はそれに火をつけると、うまさうにすひ込んで、

「君はどう見てもタコになれる男ぢやねえ。タコになれるえくせにタコになつた奴ア、二、三日でまゐつちやうから困るんだ」と言つた。タコとは、この地方に浮浪する自由労働者のことで、飢ゑると我が身を喰ふといふ海の蛸の名をそのままの意味で使用してゐるのであつた。その男は

そのタコに就て道々話した。それに依ると――

彼等タコ共は、毎年雪が消えかける頃、渡り鳥のやうに津軽海峡を渡つて北海道全道へ飛び散る。さらにある一群は樺太、千島、カムサツカまで渡つて行く。仕事は、土木、漁獵の雑役、その他手當り次第のもの。さうして再び雪が降り出して來るとその雪に追ひ立てられて南へ南へと飛び下り、最後にまた津軽海峡を越すべくこの函館の港へ群集する。それが十二月ともなれば少なくとも千人、多い年は千四、五百人となり、それらが悉く破れ果てた翅をひろげ、はるかの内を打ち眺めながら哀れな聲で呼び立てる。彼等はこつちへ渡る時は何とか自力で渡つて來たが今はそれどころではないのだ。

「ところでそいつらがそのまゝ野たれ死んだところで、この街はビクともしやしない。おれの知つたことぢやないといふ顔をしてゐる。誰か一人ぐらゐ、わしが悪うござんしたとあやまつて來るやうな奴がありさうなもんだが、そんな奴もありやしない」

「まつたくその通りだ」と北見は思はず合槌を打つた。するとその男は北見の背中をどやしつけて、

「だから君なんざだらしがねえといふんだ。そんなことに感心してそれで野たれ死んでたまるか

てえんだ。われ／＼はそこで一つたゝかひを開始するんだ。いゝかね、するとその結果、空巢、搔つばらひ、竊盜、小火なんていふ事件がひつきりなしこの街中に起る。もつとすばらしい事件が起らなけりや、たゝかひたア言へねえが、何しろ海の蛸なら八本の脚を七本まで喰ひつくしたやうなタコ共なんだから、することも半端で小うるさいばかりだ。しかし、それで相當の効果はある。この街は十年目毎に丸焼けみたいになつてゐるから、小火を見てもおぞ氣をふるうんだ。だから毎年暮になると、この街が負擔して、しやれちやねえがおあしのねえタコ共へおあしをつけて、海峽を渡してやることになつてゐる。そして、實は今日もそれがあるわけなんだが、こつちのつけ目はそこなんだ。今日はどんなことになるか、まアビク／＼しねえで僕の後について來たまへといふんだよ」

そして行つた所は、棧橋の待合室前であつた。見たところ三、四十人のタコ共が、その待合室を出たり入つたりしながら、何かもそ／＼と言ひ合つてゐた。彼等は歩かない時でも絶えず忙がしく足踏みをしてゐた。一分間でもちつと立つてゐると、足の裏が凍りついてしまふからだ。みんな雪頭巾か襟巻を頭からかぶつてゐるので、さうして足踏みをしてゐるところは蛸坊主が踊りを踊つてゐるやうに見えた。北見を案内した男は、その中をあつちこつち歩き廻つて、ひとりで

何かを引き受けてゐた。

間もなく自動車がついて、茶色のぬく／＼したオーバに緑なしの眼鏡を光らし、大きな折靴をかゝへた紳士が降りて來た。紳士は高い所から見下すやうに一同を見渡すと、しやがれ聲で、

「みんなこつちへ集つてくれ」と言つた。

タコ共は待合室の中からもぞろ／＼と出て來て、その紳士の前にかたまり集つた。紳士はそこかたまりを見ると、意外さうに言つた。

「何だ、こりや十人どころぢやないぢやないか」

「みんなで五十三人だべし」といふ聲がかたまりの中からした。

「おどろいたね。そりや困るよ」

それには何の聲も起らなかつたが、やがて、

「旦那、すまねえが現ナマで頂戴してえだがな」と言つたものがあつた。

「そりやいかん、その手にや乗らん」と紳士は胸を張つた。

「そらまたどうしてたべ」

「どうしてつて、現ナマを握ると諸君は船へは乗らずに、みんな飲んちまうぢやないか」

「御心配ねえです。みんな船へ乗るでがす」

「いや、今までの経験でよくわかつてゐるんだ。何にしても五十三人は困るな。そんな豫算はして来なかつた」

この時、北見をそこへ案内した例の男が仲間を掻き分けて出て行き、

「一體全體旦那は、何人分の豫算を立てて来たんです？」と威丈高になつた。

「そりや十人ばかりさ。はじめからさういふ話だつたぢやないか」

「なるほどはじめはさうだつたです。しかし現在はこの人数になつたのです。も少したつと、この倍になるかも知れません」

「そりやますます困る」

「それが困るなら、われ／＼はこの街にへばりついてゐるばかりです」

その男は更らに二、三步踏み出し、その「旦那」の眼の前へ突つ立つと、腕組みをし、昂然とした面構へを向けた。旦那はそれには思はず身を引いて、少し柔かい口調になつた。

「どうも諸君はわれ／＼の方のことも考へてくれなきアいかんよ。この街だつて大火の後でまだろく／＼復興もしてゐない始末ぢやないか。實は諸君の船賃なんぞ一人分だつて計上出来ない状

態にあるんだからね」

「そんなことわれ／＼の知つたことぢやないです。この街はこの街だらうが、われ／＼はまたわれ／＼です。われ／＼タコ共はいよくわが身の内に喰ふ所がなくなつたから、何とかしてくれと頼んだまでのこと、それが出来ないといふなら仕方ありません。われ／＼はもう一度この街中へもぐり、はかりです。飽くまでももぐり、込むばかりです。諸君、さうぢやないか」

彼はさう叫びながら仲間の方へふり向き、握り拳を高くさし上げて打ち振つた。さうだ／＼、異議なしだ、やれやれなどといふ聲がそこちから湧き上つた。彼はますます昂然として、

「よろしい。この街がくたばるか、われ／＼がくたばるか、トコトンまでやらうぜ」

あたりが急に暗くなつて猛烈な吹雪が襲つて来た。それは空から吹き降りるといふより地面から湧き上つた。それがそこち中をキュー／＼と渦巻き轉げ廻りながら人の眼といはず鼻といはず耳といはず忽ち眞白に縫ひ潰してしまふ。タコ共は皆道化役者のやうな顔になつた。しかも彼等の身は蓮のやうな外套やもぢり一つを唯一の防寒具としてゐるので、粉雪はその臍から背中までもぐり込んだに違ひない。しかしその男だけは尙も銅像のやうに胸を張り兩脚を踏んばつて身動きもせず立つてゐた。北見はそれをなかく勇壯な姿として見てゐたが、吹雪の強襲にはゐた

たまらず、顔を蔽つて待合室の奥へ逃げこんでしまった。

何十分かするとその男が先頭になつて、タコ共がどや／＼と入つて來た。彼は鼻の頭を眞赤にし顎のあたりに氷粒をひつけてフウ／＼いひながら北見のそばへ寄つて來た。

「うまく行つたですか」北見は訊いた。

「もちろんさ。一人残らず切符をもらつてやつた。泣く子とタコには勝てねえとよ」

彼の手には十枚ばかりの切符があつた。それを持つて彼は疊敷きの待合へ入つて行つた。そこでぶつかり次第の人に向つて何か談合してゐたが、やがて再び北見のそばへ歸つたときは切符は全部現金に變つてゐた。彼はその金を、切符を預かつた連中——さつき彼と一緒に通船から上つて來た一味らしい連中へ、いち／＼あたまをはねて分けてやつた。北見にもさうして分けてくれた。それから北見をその一味へ紹介した。

「新入りだよ。すぶのむすめなんだから、お手やはらかに頼むぜ」そんなことを言つてから、いかにも親分らしい口調で獨語した。

「さアこれでひと仕事済んだとなりや、そろ／＼次の仕事へかゝらうかい」

五

その夜その男は「モナコ船」といふのへ北見を連れ去つた。「モナコ船」とはこの街の港内に幾つかの荷物船がその赤錆びた腹を何かの死骸のやうに横たへてゐる中に、それこそ骸骨のやうな姿で、港内の一隅へぶんなげられてゐる一つの廢船のことであつた。廢船である以上だれも寄りつくどころか眼もくれない。即ちその存在を何者も認めないといふところに出來上つた一つの「治外法權地」であつた。

「運がよけりや極樂船、運が悪けりや地獄船、死ぬも生きるも運次第、それが港のモナコ船」

その男はそのモナコ船へ渡る途中、通船の中に縮まりながらこんな文句を調子外れの節で唄つた。そして例の一味のうはまへをはねたりなどして纏めた何圓かをポケットの中にじやらつかせ、

「ところであのモナコ船はおれに取つちやいつも極樂船だ。見てゐたまへ、これが明日の朝までには十倍になつてる。ひよつとしたら二十倍になる。そんなときア大將、湯の川温泉でチヨイとうまい酒を飲ましてやるぜ」と言つて「その代り君の持ち金もこつちへ預けときな。それが二十倍

になつたら、當分は吹雪の中をうろつかなくても済むてえわけだからな」と、さつき分けてくれた金をまた北見のポケットから掻きあげた。

モナコ船には、それ／＼一癖ありさうな面がまへのものが十二、三人集つた。タコらしいもの、マドロスらしいもの、荷揚げ夫らしいもの、土工の親分らしいもの、それから印半纏などをひつかけた男か女かわからないやうな年増女など。彼等は、頭が悶へるやうな船底の一室のアセチリン瓦斯の灯を取り捲いて坐り、聲限り笑つたり怒鳴つたり怒つたり嘆いたり、時には氣味悪いほど沈黙したりしながら「地獄、極樂」のやり取りをした。さうしてそれはまる一晝夜、即ち翌日の夜更けまで續いて、やうやく解散した。

北見はその解散の五、六時間前から室の片隅へ寝込んでゐたので、その間の出来事は全く知らなかつたが、例の男にゆり起されて眼を開けたときは僅か三人ばかりが残つてゐて、それが皆凄まじいほど殺氣立つてゐた。どれもこれも「極樂」を掴み損つたためらしいが、そればかりではないらしく、例の男は室の真中へ立ちただかつて、

「あんな野郎にしてやられて堪るもんか。これからおれが始末して來てやるから、てめえらはここに寝て待つてろ」と叫んだ。

「津輕ひとりで間に合ふかい？」と一人が訊いた。

「だからこいつを引つ張つて行く」とその男は北見をかへり見て「てめえらより、この青茄子のやうな面をしてブスンとしてゐる奴の方が用心棒になるんだ。なアおい」

北見もそれには苦笑するしかなかつた。しかし間もなく北見はその男について再び通船へ打ち乗り街へ引つかへした。——その男はモナコ船の一味から「津輕」と呼ばれてゐたので、今後はその名で呼ぶ。

津輕は街へ上ると、とあるバラツクの居酒屋へ立ち寄り、焼酎の立ち飲みをした。それから焼跡の原つばを横切つたり眞暗な横丁を抜けたりしながら、この街は出来損ねの化物街だと罵つた。満足な人間は一人も棲んぢやゐないと言つた。「狐」や「熊」はむしろ人間らしい方で、人間の皮をかむつた大貉が威張つてやがる街だと言つた。やがてある一廓——そこは街の場末、バラツクとも本建築ともつかぬ小さな平屋が四、五十軒かたまつた場所で、頬を猿のやうに染めた女や、桃色のチョコリや草色のチマを着けた朝鮮女がうよ／＼してゐた。その中の一つの路地へ入つて行くと、津輕は、

「これが化物街の尻尾だ。ひでえもんだらう」と大きな聲で言つて空笑ひをした。かういふ場所

で、北見のやうな男が用心棒の役をするとは滑稽な話だが、二、三日來何かに憑かれたやうになつてゐた彼は、場合に依つては何をしでかすか自分で自分がわからないやうにもなつてゐたのである。津輕はさういふ彼を巧みに利用する氣だつたらう。

酒場の中はテーブルが三つ、ポツクスが四つばかりの洞穴のやうに暗い部屋、その奥に小さなコークス・ストーヴが置いてあり、三人の女がそれを抱くやうにしてゐるのを、津輕は尻眼にかけてづか／＼とポツクスの一つへ入り、

「ウキスキー」それから少し語氣荒く「まア公はどうした。まア公を出せ」と言つた。

「まアちゃんは酔つぱらつて寝てるわ」と女の一人が答へた。

「ぢやマスターを出せ。津輕といふ男がちよつと顔を貸してくれと言つてると言へ」

「津輕といふ男だつて、いやなつウさん」と外の女が言つた。

「なに！」と津輕はそれを蹴飛ばすやうに「マスターを出しやいゝんだ」

「マスターは留守なのよ」と、はじめの女が逃げ腰で言つた。

「嘘つけ」

「嘘ぢやないの」

「じれつてえ。だからまア公を出せといふんだ。どうせ狸寝をしてやがるんだ。構アねえから叩き起して來い」

女は首をすくめて奥へ引つこんで行つた。津輕は運ばれたウキスキーを一息に飲むと、あとは巖を持つて來させて自分で注いで續けざまに五、六杯あほつた。北見も飲めない口にならぬ。そしてうしろの壁へぐでんと引つくりかへつてゐると、いつの間にか自分もいつはしのタコになつたやうな氣がした。タコらしい生活に入つたのは昨日からだだが、棧橋待合室前のあの光景を目撃し、「モナコ船」であゝいふ場面を見ながら一夜を明したりしたことが、いつか身にいつてゐるやうな氣がした。そして事實そのからだにはタコの臭氣や「モナコ船」の匂ひが、むんむんするほど浸みこんでゐたのだ。

「どうせ今夜も夜明しだから、落ちついて飲みなよ。酒はいくらでも出させるぜ」

津輕がそんなことを言つてゐるところへ、臙脂色の洋服を着た女がふらりと現れた。しかしそれが雪子であつたのだ。

狭い街内のことだ、しかもお互ひに「街裏」ばかりに棲んでゐる人間だ。何處で鉢合せしやうと今更ら不思議はなかつたが、北見は二度と雪子に會はうとは思つてゐなかつた。自分から逃げ

去つた雪子の方は勿論だらうが、彼自身も雪子との縁はきれいに断ち切つたつもりでゐたのだ。昨日から今日にかけて、その身にタコの臭氣や「モナコ船」の匂ひが浸みついてしまつたことがまた更に彼をさういふ氣持ちにしてゐた。だけにこの鉢合せは残酷だと思つた。それだけは見たくないと思つてゐた雪子の正體を、こんな場合にだしぬけに見せられたといふことに對しても残酷だと思つたが、それ以上、何とも口では言ひやうもないといふ残酷さを感じた。

彼はその場を逃げ出すか、でなければ逆に雪子へ喰つてかゝるか、といふ混亂した意識で、腰を浮かし、また沈め、やりどころのない視線を徒らに持てあましてゐた。

しかしその混亂は雪子が立派に整理してくれた。雪子はその青白い薄笑ひの中に何ももの受けつけないといふ冷静な反撥力を浮べ、互ひは言葉も通じない異國人だといふやうな態度を臆面もなく見せたのであつた。北見は眼を伏せて腰を沈めた。

自分のことに興奮してゐる津輕は、彼と雪子のこの「默劇」などには氣もつかないらしく、ウキスキーの酔ひで脂ぎつて來た顔を、雪子の方へ突き出して言つた。

「いやに落ちつきやがつて、てめえの親爺を出せといつてるんだよ」
しかし雪子はますます落ちき、冷たい聲で、

「うちの親爺さん、行衛不明なの」と言つた。

「とぼけるな。ゆんべのモナコ船の一件はてめえも承知だらう？」

「知らないこともないわ」

「承知なら、てめえもぐるになつて親爺をすらかしたんだな」

「さアどうだか」

「間抜けめ。てめえの親爺はあの野郎みてえな年増と出來てやがるんだぞ。てめえのことなんざ飼猫ほどにも思つちやゐねえんだぞ」

「あらまア……」雪子は空虚な聲を出した。

「そいつらがぐるになつて神聖なモナコ船を穢しやがつたんだ。舐めるにことを缺いて仲間を舐めやがつたんだ。そんな奴らは仲間からどんな目に會はされるか知つてるだらう。てめえはそいつらを庇つてやる氣か」

「あたしは庇つてやるもやらないもないさ」

「はつきりしろ。命知らずが揃つてるんだ」

「どうぞ好きなやうに」

雪子は煙草に火をつけ胸一ぱいに吸ふと、口を尖んがらして青い煙をほろ／＼と吐いた。その人を喰つた態度を見ると、津輕はどうしてくれようといふ風にぐつと息を呑んでもの凄しい形相をした。不気味な沈黙がちよつと續いた。そこへドアが開いて、十ばかりの赤いマントを着た女の兒が先に、尺八を持った盲目の男が長い黒マントを引きずるやうにして入つて來た。盲目の男はすぐ尺八を吹き出したが、女の兒はボカンとした眼を開け、そこにゐる人々の顔を順繰りに見廻してゐるうち、白痴のやうな顔をして動かなくなつてしまつた。さつきからその部屋に渦巻いてゐる險惡な空氣が、なんにも知らないその少女の顔にも反射したのだらうか。盲目の親方は尺八を吹き止めてどなつた。

「ガキ奴、なにしてるだ。ぶつくらすぞ」

少女はギクリとして唄ひ出した。唄はこの春のこの街の大火をチヨンガラ節にしたものであつた。泣きさうな聲で一つの文句を唄ひ終ると、ウーウ、ウーウ、ウーウ……と咽ぶやうに間を入れる。それが盲目の吹く尺八の音と妙に絡みもつれて、何ともいへぬ不思議な哀音を漂はせた。「やかましい、こいつめら」津輕がいきなり怒鳴り出した「てめえらがそんな唄を唄ひまはるから、この街にやろくなことが持ち上らねえんだ」

「へえ／＼」と盲目は尺八を胸に抱いて「旦那だつたかね、一向に存じませんで。いや、昨日は御苦勞でござりました。タコ仲間ぢやたいへんな評判ですが。命の恩人だといつてやす」

「一錢も出ないよ」

「いや、こりやほんとのことを申すんですよ。もし旦那になんかの出入りがあつたら、いつでも命を棄てゝ加勢するといつてましたよ。まつたくあの瀧公だの寅だの平公だのと來たら、命知らずですからねえ……」

津輕は、十錢玉一つをテーブルの上へパチンと置いて、

「いゝからさつさと出てけツ」

「これはすみません、そら、いたゞいといで」

親方は女の兒の背中を押し出した。女の兒は眼をとがらしておそる／＼寄つて來ると、素早く十錢玉を掴み取つて、親方の背後へ走り去つた。

そこへまたドアが音もなく開いた。見ると棒のやうに細長い一人の男が、スキー帽で顔をつゝんでのつそりと立つてゐた。盲目の親方もそれにすぐ感づいたらしい。しかもそれは彼等に取つて苦手の者らしく、肩をすくめて後去りながら出口まで行くと、カンガル―が子を抱くやうに女

の兒を黒マントの中へ捲き入れて出て行つた。

棒のやうな男は、兩腰をうしろに廻し、二足ほど雪子の方へ寄つて來た。眼だけ出してゐるせゐか鼠の眼のやうに光る。それで部屋中をゆつくりと見廻してから、その男は底冷たい聲で言つた。

「おいまア公、忘れたのかい？」

しかし雪子はそれへ答へる代りに、青白い顔を向けただけであつた。

「いゝ加減に出て來たらどうだ」

「……………」

「どうしても出て來ないといふのかい？」

雪子はそつぽを向いて、

「あゝ、出、な、い、ね」と一つ一つ投げ棄てるやうに言つた。

「いやがつたな。出帆は明日の朝に延びたんだよ。なんの爲めに延びたのか知つてるかい？」

「知らないね」

「よし、もう口ぢや言はないよ」

「お互ひさま」

「畜生、見てゐやがれ！」

その男は、津輕の方をチロリと見てから眼の前の椅子をダンと蹴倒して出て行つた。それはほんの二、三分間の出來事であつたが、そこにゐた三人の女給は顛へ上り、顔を見合せながら奥へ逃げこんでしまつた。

「まアちゃん！」うす汚れたコツク服を着た老人がいつか出てゐて、雪子の背中へ呼びかけた。

「たのむからあいづらん所へ行くなり、どつかへ逃げるなり、何とかしてくれよ。今晚こそどんなことになると思ふ」

雪子はそれへは見向きもしないで、

「ほつといつたら」

「あゝ、あゝ」と老コツクは、胡桃のやうに深い皺の寄つた顔を打ち振つて溜息をついた。

「まアちゃんは彼奴等の妻えのを知らねえんだ。ぐづくしたらほんとにやられるんだ」

「おい爺さん、そつちにも芝居がはじまつてるんだね」と津輕が口を入れた。

「何だか知らねえが、ゆんべから妻えいきさつで、わしやもう見てゐられねえんだ」

「前に狼、後に熊か。かうなつちやまア公も、逃げも隠れも出来ねえだらう」

「だからあたしは逃げも隠れもしないぢやないか。どうにでも勝手にするがいのよ」

雪子は水のやうに冷たく澄んだ眼を宙に浮かし、身動きもせずにある。

「おつそろしい女だなア！」老コツクはまた白髪頭を打ち振つた。

ドアの外に何人かの足音がして、こんどは四人ばかりの男がどや／＼と突入して来た。その中には今出て行つた棒のやうな男も入つてゐた。どれもこれも、スキー帽や雪頭巾で顔を包み、ぐつと顎を突き出し、キロ／＼と眼を輝かしながらいやに鳴りをしづめてゐる。それを見た津輕の血相は見る／＼變つた。彼は壁へ凭せてゐた身を徐ろに起してボツクスの端へにじり出た。これは正に雪子を狙ふ狼と熊群であつたが、雪子へ飛びかゝる前に、どうやらこの狼と熊群との渡り合ひとなりさうな氣配になつた。両者は互ひに睨み合ひ、何かチラリとでも動いたなら、全部一せいに動亂し出しさうな鋭い沈黙をつゞけてゐる。

しかし雪子は坐つた場所から一步も動かさず、片手でこめかみを支へたまゝ、青白い眼をバツキリ見開いてゐる。その眼からは燐光のやうな光が流れ出してゐる。それは正しく「死」に直面してゐる眼であつた。しかしそれは「死」を怖れてゐる眼ではなく、一刻も早く死を待つてゐるそ

の恐怖であつた。

あの單純な氣のいゝ雪子が、かうまでなるものか。北見はいつか立ち上つてゐた。

六

それからの動亂に就ては一々書く要もあるまい、結局津輕は床の上に叩き伏せられ、雪子は熊の一群に拉し去られ、北見はその場にぼつんと棄て置かれたのであつた。彼が怪我一つしなかつたのは奇蹟といつていい。

この後の五日間ばかりの彼の生活はお話にならない。彼は吐く息もほそ／＼とその場に消えて失くなりさうな氣がしながら、津輕が分けてくれた僅かの金を頼りに、たゞうつら／＼とその日を送つてゐた。その間に例の古靴屋へも立ち寄つて見たが、店先には「當分休業」の札が貼られて戸じめになつてゐた。仕方なし彼は場末の木賃宿で夜を明した。何かかう天地晦冥といつたやうな生活であつた。

五日目の夕方、彼は自分の死に場所を探すやうなつもりで、津輕が常宿にしてゐる海岸通りのこれも木賃宿に近い宿屋へ出かけて行つた。すると、まだ例の負傷で呻りながら寝てゐると思つ

た津輕が、もう起き出してゐるところか、いつかの金縁眼鏡を掛け、またチョボ髯を立て、既製の品ではあらうが眞新しいオーバーをしゃんと着込んで、今夜の船で内地へ行くのだといふ話。北見もこれにはちよつと啞然とした。津輕のやうな男は、瀕死の負傷をした野獸が自分の舌で傷を舐めなどしてゐるうち、いつかけろりと常態に戻るやうな體質に出来てゐるらしかつた。北見はさういふ津輕に不死身の強さを感じると同時に、自分のやうな人間の空虚な弱さをしみじみと感じさせられ、かういふ男の仲間にはたうてい入れる人間ではないと、つくづくと感じさせられた。彼はそこ／＼にその宿を出ようとする、津輕は呼び止めて一枚の紙幣を出し、「もつとやりてえが、まア公でドヂを踏んだからな」と笑つて「あいつ奴等、まア公を山ノ手の穴へ叩き賣つて、うめえ酒を飲んでてえが、まつたく癪な話だ。まアそのうち見ろてんだ」と言つた。

北見は胸がドキンとしたが、そのまゝそこを出た。

やがて彼はぼんぴきを探すために、カリ／＼に凍つた雪の上を舊棧橋通りへ出かけて行つた。あの雪子こそ既にこの世にはゐないものと彼は觀念してゐたので、津輕の話も半信半疑ではあつたが、さう聞いてはちつとしてゐられなかつたのだ。自分ながらをかしの心理だつた。

ぼんぴきはすぐ見つかつた、折からまたも吹き降りて來た粉雪を電柱のかけによけながらつくねんと立つてゐた。

「おい、たのむよ」さう聲をかけると、その男はゴム長をぼこ／＼いはせながら寄つて來て、

「旦那は、船のもんぢやねえやうだね」と言つた。人を見くびつてゐるなと取つた彼は、ちよつと虚勢を張つた。

「かう見えても相當なお客なんだぞ」

「しかし、あつちへ行つてから名刺を出して、同行しろなんてのはいやだからね」

「あゝさうか」と彼は苦笑して「そんな商賣をしてゐて、その見分けがつかないのかね」

「さういふが旦那、この節變裝がうまくなつて、うつかりすると引つかゝるんですぜ」

言ひながらその男は、彼がさういふ種の人間でないことは見抜いたらしく、頭巾の縁をすり下しそれで顔を包んでから、ついて來いといふ風に歩き出した。彼はそれに肩を並べて歩いて行つた。その十日前、はじめてこの街へ上つた夜、あの宿引ともぼんぴきともつかぬ男などを只怖ろしいものに見た時の自分を思ひ出し、こんなことにもなるものかな、と思つた。

電車路を横切り、暗いだら／＼坂を登りはじめたところで、その男は、

「旦那の景氣はいゝんでせうね？」と人の懷をさぐるやうなことを言ひ出した。

「良くも悪くもないわ」

「わしらはからきし駄目です。今年は沖捕りが當つて三十五ヶ月のボーナスが出たなんていふ会社もあるが、こちらにやまるきしひゞいて來やがらねえ。この街は生きてるのか死んでるのかわからねえ街ですよ」

「化物街だからね」

「まづたく化物街さ。欺したり欺されたり、喰つたり、喰はれたり、ひでえもんだ」

「君なんか欺したり喰つたりする方だからいゝぢやないか」

「そりや旦那の方でせう。旦那もなんかの化物らしいね。へッへッ」

歩いてゐるうちに彼はもうものをいふのも厭になつたが、しばらく歩いてから、

「それはさうと、この三、四日前に新入りした女を知らないか？」と訊いて見た。

「三、四日前？ そいつア知らねえ」

黙つてゐると、その男は、

「わつしやもぐりぢやねえから安心してくんなよ。これでもこの商賣に七年あまり年季をこめて

もう免許皆傳てえわけだからね」

「ぢや、穴はみんな知つてるわけだな？」

「知らなくつてどうします」

「そんなら、僕の探す女がめつかるまで案内してくれるかね」

「あゝ、お安いこつてさア」

二、三度右へ左へ折れて行くうちに、道はいよゝゝ狭く暗くなつた。と、その男は、ちよつとこゝに待つてくんな、と言ひ置いて、やつと一人が通れるほどの路地へ首をこめて入つて行つた。が、すぐ出て來て、

「先客が買ひしめてやがる」

それから一町ほど歩いてまた一つの路地へ入つて行つた。そこでは三、四分待たしてから出て來て、彼を手招いた。その家は、路地のつき當りにあつた。格子戸を開けると、六疊ばかりの間に灰色の布が真中からぶら下り、その蔭の小さな木炭ストーヴの傍に一人の女が坐つてゐた。それがひよいと振り向いた顔は只のつべらぼうであつた。彼は逆毛立つやうな思ひで身を引つてめた。

第三の家もやつぱり路地奥にあつたが、これは小綺麗な入口であつた。そこには三人ばかりの女が炬燵を圍んで猫のやうにうづくまつてゐた。どれも張子人形のやうな顔をしてゐた。

彼はそろ／＼やりきれなくなつて來た。歩いてゐながら地面の中へ吸ひ込まれさうな氣さへする。もし雪子を探し損つた場合はどうする？ いゝ加減に見切りをつけないと絶體絶命の中へのめり込むぞ！ と自分へ警告した。それに假りに雪子のありかを探し得たとしても、二人の關係は外部からも内部からも完全に斷ち切られてゐるのではないか。あの酒場で會つた場合ですら、あのやうな態度を取つた雪子が、今、それよりもひどい「地獄」の中で會つたなら、どういふ態度に出るだらう。それは自分からみす／＼底知れぬ淵へ入つて行くやうなものではないか、とも自分へ言ひ聞かした。彼は雪子がこゝまで叩き落されるまでの徑路を考へて見た。いろんな狼や熊が雪子一人を狙つて群集し、つひに雪子の最後のものまで喰ひつくしてしまつた現在を考へて見た。だがさういふ自分もその雪子を喰はうとしてゐるものではないからうか。最早骨ばかりが残つてゐるやうな雪子をかうして探し求めてゐる自分は、あの狼や熊共以上なのではないか、とさうも自分へ言つて見た。しかし彼はそれでも尙ほ雪子を探すことを思ひあきらめることが出来なかつたのである。

彼はもう少しでへたばりさうになる身を辛うじて支へながら、浪々と歩いて行つた。さうして行つた四軒目の家は、十段ばかりの石段を降りたそれこそ穴のやうな窪地の底にあつた。入口の前の僅かな空地には、粉雪が青々と積つてゐる。それを踏んで案内の男が硝子戸をガタリと開けると、うす黄ろい灯と一緒に暖氣が流れ出した。その中へ彼はおづ／＼と顔をつき出して覗いた。大きな爐の上に石炭ストーヴがかつ／＼と燃えてゐて、その前に一人の女がうつ伏して新聞を讀んでゐたが、上げた顔を見るとそれが雪子であつた。

雪子の顔は彼を認めた瞬間、何かパツとひらめくやうに動いた。それは先夜あの酒場で鉢合せした時のそれとは全く正反對のものゝやうに感じた。その眼の輝きにはいきなり彼の胸を刺すものがあつた。

「いらつしやい」雪子は軽い聲でさう言ひながら立ち上り、奥へ引つ込んで行つた。彼は上り框へ腰を下し、深い溜息をついた。溜息につれて涙が流れて來た。それを手の甲で拭きながら泥靴の紐をほどいた。

「寒いのに御苦勞さま」

彼と案内の男が爐端へ坐つたところへ、青ぶくれのしたおかみが出て來てそんなことを言つた。

そして彼のみすばらしい姿を無遠慮に見廻した。彼はからだ中がいつかぶる／＼顔へ出してゐたので、身なりよりはそれに氣づかれるのが辛かつた。それをまぎらすために、さつき津輕から貰つた紙幣を取り出しておかみの膝の前へ置いた。話はすぐにまとまつた。

間もなく彼は、おかみに呼ばれて出て来た雪子の後について廊下へ出た。廊下のつき當りに一つの土蔵があつた。雪子はその黒光りする重い扉を開けて彼を引き入ると、階段を上つて行つた。さうして行く間にも、雪子の興奮した息づかひが彼の耳へはつきり聞えてゐた。それは既に冷却した彼の胸へ活を入れるやうにひゞいた。さうして二階座敷へ上ると、雪子は黙つて力限り抱きついて来た。抱きついただけでは足りず、相撲を取るやうに全身を揉み動かした。さうしながら雪子はくつ／＼と咽び出した。あの酒場で見せた冷酷な絶望的な態度も、この街へ来た最初の夜、古靴屋の二階で見たあのプロステチュートのやうな態度も、今の雪子には跡方もなく消えうせてゐた。

二人が爐端へ坐つて話が出来るやうになるまではそれから可なりの手間がかゝつた。雪子は、その部屋に備へてある茶籠笥の上からフラスコを取り上げ、半分凍つてゐるやうな水をゴク／＼と飲んだりしてからやつと落ちついた。

「來てもよかつたらうか？」

「今さら……」と雪子は恨めしさうな眼をして「あなたこそ愛憎がつきない？」

「こゝまで來てはなんにもいふことはない。おれはお前がかうして生きてゐたのを見ただけで、満足だ」

「えゝ、こゝへ來るまではあたし、殺されなければ死ぬつもりだつたの」

「今は？」

「かうまでなれば死んだも同じだし、今さら死なうとは思はない。それにかうまでされて死ぬなんて馬鹿々々しいもの」

「あの命知らずの連中は？」

「あの連中もするだけのことをしたから、きれいに手を引いてしまつたわ。おかげで、酒場の親爺とも、津輕の一味ともすつかり縁が切れた。さすがにこゝは地獄だわ」

雪子は軽く笑つた。

「でもそれだけ元氣ならいゝ」

「元氣になつたのはあなたを見たからなの。あなたがかうして來てくれた上は、あたしもすつか

「心がきまつたわ」

「どうするのだ？」

「逃げるのよ」

「逃げられるか？」

「逃げられるわ。逃げて見せるわ」

「さうか。しかし逃げるといへば、あの靴屋の二階で會つた夜、逃げりやよかつたぢやないか」

「あの時もし逃げたら、あなたまで殺されるかも知れなかつたの。逃げなくたつて、危なかつたのですもの。だからあたしはあゝしてあなたから離れてしまつたの」

「やつぱり善良な女なのだ。だから周囲の条件によつてどんなにでもなるこの善良さを、そのまま生かしてくれる場所が、一ヶ所ぐらゐるこの國の内に在つてもよささうなものだ、とさう彼は涙ぐましい氣持ちで思つた。

「するとやつぱりこゝまで来て、逃げる道もついたわけなんだな？」

「えゝさう。こゝだつてへたに逃げると思ひけど」

「どんな奴が見張つてゐるんだ？」

「あの靴屋の親爺さんよ」

「へえ、あれが？」

「あの親爺さんは店をしめて、そしてこゝのおかみとこの家を共同に經營してゐるの。あの二階にゐた時分は、酒場の親爺とぐるになつてあたしを見張つてゐたが、こんどはこゝのおかみとぐるになつて見張つてるの。あの親爺さんとあたしは前世から敵同志だつたんでせう」

「だうりで變な奴だと思つてゐたが、やつぱりさうか。あれは熊は熊でも穴熊の方だね。今夜も階下にゐるのかい？」

「夕方どつかへ出かけたけど、もう歸るでせう。あなたの顔を見られたら困るから、そろゝ引き上げて、外に待つてゐてね」

それから二人は、雪子がこの家を出る時刻、その道順、二人が出合ふ場所、出會つてから姿をくらす方法などを相談した。

しかし戸外の吹雪は、この二人の脱走を遮断するかのやうにビュウ／＼と渦巻き荒れてゐた。

故郷

一

母はある小寒い日、ひとりで麥蒔きに行き、そこで腦溢血を起して倒れ、七日ほどして死んだ。父はそれから四年して、黄疽から肝臓病となり、半年ばかりの間にちり／＼と弱つて死んだ。それからすでに十七年になる。

今、この家には村の他人の一家族が棲み、百姓をしてゐる。自分達兄弟は四人あるが、四人とも村を離れてしまひ、家を守るために残るものがなかつたのである。このことは父の意志に反くこと甚だしいものであつたが、いまなほ、兄弟の中でこの家へかへらうとするものがないのだ。

父は、死ぬ前、このことをよく見抜いてゐて、死ぬにも死にきれない思ひでゐた。當時すでに兄弟三人まで家を出てゐたので、父は末子の實まごと二人きりで、うす暗い家の中にひっそりと棲ん

でゐたのである。兄弟三人は代々／＼歸省して父を見舞つてゐたが、それだけのことでは父は少しも楽しまなかつた。

十月末のある日、自分が父を見舞つた時のことであつた。父は表座敷の切炬燵へどてらを引つかけたまゝごろ寝をしてゐたが、土間へ立つた自分を見ると、もつくりと起き上り、「やつぱりお前か。けふはだれか東京から來さうな氣が朝からしてゐたのだ」と、いつもと違ひひどくそれを待ち受けてゐたやうに言つた。眼も頬もげそりと窪み、灰色の口髭の間から見える齒が妙に白つぽく、その十日ほど前に見舞つた時とはすっかり變つてゐる。いよ／＼いけないな、と思ひながら自分は靴を脱いだ。

父は、差し向ひに炬燵へ坐つた自分へ、何かおちつかぬ風でその後の病氣の經過などしばらく話してから、立ち上つて奥の座敷へ入つて行つた。そして、古ぼけた一つの手文庫を取り出して來て炬燵の上へ置いた。表には「重要書類」と若い頃の元氣な父の字で書いてある。三十年前、父が本家から分家してこの家を建てた時分から持つてゐるものであつた。父はその蓋を丁寧にあけて、一番上に載つてゐる半紙四五板ほど綴つたものを取り上げた。その表紙には父の最近の字で「家督相續之件」とある。これは顛へた力のない字であつた。

「今日はひとつお前に特別の頼みがある」と父は切り出した。「といふのは、お前など考へてゐることかどうか、この家はうつかりすると断絶するおそれがあるのだ。男の子ばかり四人もあつて、断絶するおそれがあるとは變な話だが、實際に於てさうぢやないか。先づ肝心の長男がこの家へはかへらぬといふ。次男のお前は始末のならぬ風來坊だ。三男の野郎もどんなものになるか解らぬ學生だ。すると最後のたのみは、いま家に残つてゐる末弟の實きりだ。あれをいやでも應でもこの家の後取りとするより外はなくなつたが、長男の廢嫡をしない以上末弟に家督を譲るとは法律上許されない。さア困つてしまつた。こいつを考へ出すとわしは夜もおち／＼眠れないのだ」

「それは困るでせう。だからやつぱり家督はあたり前に長男に譲つたらどうです。何處で家督をついだつて、ついでことに間違ひはないのだから、一家が断絶するなどといふことはないでせうが」

自分がかう言つて見た。

「それが間違つてる」と父は聲を大きくした。「貴様等の考へとわしの考へとは根本に於て異つてゐるのだ。貴様等の考へは現代式といふのだらうが、それだから地方の百姓村はますます疲弊

して行くのだ。東京の奴等、いゝ着物を着てうまいものを喰つてチャラチャラしてゐるが、田舎の家が無くなり田も畑も荒れ果てゝしまつて、米も麥も藪も出来なくなつたらどうするのだ。はだかで砂利でも喰つて生きて行かなければなるまいが」

父はその七年ほど前まで、三十年近く、隣村の小學校の教師をしてゐた。まるで寺子屋みたいな小學校で、月給も尠なく従つて一方で百姓でもしなければ自分達四人の子供も育て得られなかつたわけであるが、とにかく漢學仕込みの頭ではゆる道を説くといふことを小學校教育の本旨として押し通して來ただけ、ともすればかういふ風に自身の子供に向つても慨世的の言葉を大聲に吐くのが癖であつた。しかし今日の病みほゞけた父にそれほどの元氣があるはずはなく、理由は外にはつきりしてゐるだけ、その大きな聲をきゝながら自分は痛々しい思ひになつた。自分は父をなだめるつもりで答へた。

「それぢやこの家は實に繼がせることにしたらいゝと思ひますよ。法律上のことはどうでもいゝぢやないですか」

「さうだ。法律上では長男を立派に相続人とする。然し、實際に於ては末弟を後繼者として、この家と財産を守らせて行くことにする。但し、ただそれだけでは長男が可哀さうであるから、財

産の十分の一だけ分けてやる。それは、賣り拂はうと何しようか勝手だ、といふことにしたいのだ」

全部でも、米にしては二十四五俵、麥にしては十五六俵より穫れない田畑を、その十分の一だけ分けるなど聞いたたら、長兄はその子供だまし見たいなことに對して——父からすれば全くその通りなのだ——腹を立てることだらうと自分は内心に思った。

「ところでこれはわしの獨斷ではなく、本家の主人ともお前達の伯父ともよく相談した上での取り極めなのであるが、もしこれに對して長男が不承諾を稱へるとなると、事は面倒になる。お前に頼みがあるといふのはつまりこのことで、わしから直接話しては角が立ち不調になるおそれがあるので、お前からよく兄貴へ話して、家のため、故郷のため、それから貴様等兄弟の將來のため、いさぎよく承諾するやうにしてもらひたいのだ」

「それは解りましたが、それだけの理由以外の理由がないなら、十分の一などといふことは止して、全部を賣へやるといふことにしたらどうです」

自分は出来るだけ穏やかにそれを言つてみた。

「さう出来たらそれに越したことはない。全くそれ以外の理由などあらうはずはないのだ。簡單

明瞭なのだ。この家を守つて行くものが財産を繼ぐといふ原則しかないのだ。長男がかへつてこの家を守るといふなら、それ以上のことはないのだ」

父はそこで眉をしかめ、灰色の髭を引つばつてゐたが、

「だが然し、貴様等は東京のチャラチャラ生活を覚えてしまつた。だからこの家へかへるなどと言ひ出したところで、うつかり信用は出来ない。どうせ財産ほしさの口實だ。手に入れるや否やきれいに賣つ拂ふにきまつてゐる。——これまでにこの家を仕立てたわしの苦勞は全く並大抵ではなかつたのだぞ。貴様等にはてんで解らないのだから仕方がない。瘦せても枯れてもこの家、この土地は貴様等の生れ故郷なのだ。その故郷のほんたうの有り難みといふものを、貴様等はまだ知らないか生意氣なことばかりぬかしてゐるが、そのうちきつと解つて来る。その時になつてこの家も屋敷も亡くなつて、他人の桑畑にでもなつてゐて見る。人は死ぬとその靈魂は必ず故郷の家へかへるといふが、貴様等が死んだらその靈魂はどこへかへらうとするのだ。いや、死ななくとも、いつか貴様等の心は、故郷へかへりたくなるに違ひないが、その時、どこへかへるつもりなのだ！」

父は咽喉をせい／＼言はせながらやつとそこまで言ふと、おろりと首を垂れた。

これは父の死後知つたことであるが、父は二十何年前、田を買ふために、何百圓かの借金をした。しかしその利拂ひに追はれて容易に元金へは廻せず、やうやく全部済し切つたのはたつた去年のことだつたのである。父はこれを生前に一言も言はなかつた。それを言つて相続の件を持ち出せば、この家と財産を亡くすまいとする父の意志が、當時の自分達にももつと徹底したに違ひなかつたが、つひに言はずにしまつたといふのは、さういふことを楯に取つてこの問題を解決することが父としては不愉快であり、もつと公明正大な理窟から納得さすべきだ、といふ風に考へてゐたのに違ひなかつたのである。その時の自分はそのまでは知らなかつたので、例の「道を説く」元氣がまだ残つてゐるのかなと思つたが、それが有りつたけの聲を出しきつたやうにして首を垂れた父を見ては、自分も頭を下げるしかなかつた。

「よく解りました。その問題の解決はたしかに私が引き受けました」

「しかし兄貴は承諾するか」と父は不安な顔を上げた。

「しますよ。兄貴だつてお父つあんその氣持ちがよく解つてしまへば、さう頑固に長男の権利を主張するやうなことはないはずですから」

「さうあるべきだ。だが長男の権利は尊重しなければならぬから、やつぱり十分の一だけはやる

ことにしよう」

父は目をつぶつてごくりとつばを呑んだ。それから「家督相続之件」の綴り半紙をひろげて自分の方へ差し出した。それは一つの契約書で、長男はどこそこの田をどれだけ自身名義とするかと、その他は全部賣却の形式で實の名義に書きかへることなど詳しく書き分けたものであつた。

立會保證人として本家の主人と伯父が署名捺印してあつた。父はある場所へ指を押しつけて、

「こゝへ兄貴が姓名を書いて實印を捺せばいゝのだ」と言つた。

二

翌日歸京した自分は、さつそく兄貴の家へ出かけて父の話を取りついで。兄はその問題はすでに伯父から聞かされてゐると言つて、

「親爺の氣持ちはよく解るさ。けれども親爺は、あの家を繼いで百姓してゐりや、あの家をどこまでも守つて行けると思ひ込んでゐるところに大きな誤算があるのだが、それを考へないのだから困るよ。俺もよく調べて見たが、誰がやつたつてあの家ぢや喰つて行けやしないぜ」

「しかし、そんなことを親爺へ言つたら、それぢや貴様等は東京で立派に喰つて行ける自信があ

「さう言はれりや困るがね、そんなら實際にあればかりの地所を持つて、しかもあゝしてぢり

ぢりと貧乏してやがては廢村にでもなりさうな運命にあるあの村の中で、あの家だけを立派に守つて行ける自信を誰が持つてゐるかね。この方がもつとはつきりしてゐるぢやないか。親爺は外に僅かでも學校の給料があつたのでどうにかやつて來たんだが、それがなかつたら、實がやらうが誰がやらうが、結局は家屋敷まで亡くしてしまふに違ひないんだ」

「俺も實はさうも思つてゐる。といつてそこまでは今の親爺には言へないね。この十日ばかりでつそりとやつれてゐたからな」

「靈魂のことを持ち出すやうになつちやね。だからいさぎよく承諾することにしようよ。それはどうせ親爺を安心させる手段に過ぎないんだから、長男の權利だの、十分の一の分け前だのはさつぱりと返上して、一切合切實へゆづり渡すといふことにしよう」

「だけどさういふことを言ふと、かへつて親爺に疑ひを起させることになるから、不承無承ながら十分の一はもらひ受けます、といふことにしたらどうだ」

兄は苦笑して、

「まあ、それもさうだな」と言つた。

二人はそこでふと深い沈黙へ陥ち込んだ。よし、親爺はそれで安心して死んだとしても、やがて亡びて行くに違ひない故郷の家の運命を、かうして二人で話し合つて見ると、やつぱりうすら寒い憂鬱を感じて來たのである。二人は改めて、父の家を守るための方策をあれこれと検討して見た。が、結局絶望だつた。自分達一家と同じ程度の田畑を持ち、その上小作をして牛馬のやうに働いてゐる村の百姓の中で、その實例は幾軒も數へることが出來た。そこで自分は、年々疲弊して行く農村と、それにつれて離村して行く若者達の多くなつてゐる問題へ話を移して見たが、それはすぐ自分達の力ではどうにもならぬもつと大きな問題へぶつかつて來たので、いゝ加減に話を打ち切り、持つて行つた契約書を兄の前へ置いて引き上げた。

三

それから一週間ほどしてまた父を見舞つた時である。門を入つて行くと、實が竹箒で庭の落葉をはいてゐる。中學へ通つてゐる實がけふは日曜でもないのにどうしたことかと思ひながら土間へ入つて見ると、父がいつも坐つてゐる切炬燵のところには、本家の主人がひとりこちんと坐つ

て煙草をふかしてゐた。何とも底寒い空氣である。たうとう父は寝ついたのだなと自分はすぐ解つた。と、本家の主人は、

「いゝところへ歸つてくれた」と言ひ「どうもよくない。下痢がひどくなつて、醫者が毎日來てゐてもどうにもならないでな」と言つた。

自分は襖を開けて中の座敷へ入つて行つた。父は大きな蒲團をかぶつて向ふを向いてゐた。自分はその方へ廻つて枕元へ坐つた。すると父は、自分の坐るのを待つてゐたやうにして眼を開けた。僅か一週間でがらりと容子が變り、ひどくどす黒く小さな顔になつてゐる。今までの父らしいところがすつかりなくなつてゐる。自分はそれに打たれ、すぐには口もきけなかつた。

父は赤味も消えた白つばい舌で乾いた唇を舐め、咽喉底で、う、う、と呻つてから、

「この前頼んだ話のきまりはついたか」とかすれた聲を出した。

「あゝ、つきました」と自分はすぐ答へた。が、それだけでは父には物足らぬだらうと思ひ、もつと何か言はうとすると、父は自分をまじく見守り、

「さうか、よろしい」とうなづき「今のうちお前達へよく言つて置くが、この家は決して亡くしてくれぬなよ。この家を亡くすことは、死んだおつ母さんやこの親爺や、それからお前達の靈魂

の置き場所を亡くすことだと思ふがいゝぞ。決して、財産のことばかり言つてゐるのではないのだぞ」と言つて、そこでしばらく息を入れて休んだ。それから、「お父つアんもいよゝゝ駄目だから、お前達もあきらめるがいゝ。かうして寝てゐても、しんから大儀になつた」と言ひながら眼をつぶつた。と見ると、瞼の上へ涙の粒が盛り上つてすいと頬へ傳つた。

自分はまゐつた。せめて兄が署名捺印した契約書を出して見せたいと思つたが、かうまで弱つてゐるとは知らなかつたし、うかつにも自分はそれを見から取つて來てゐなかつたのである。父はこゝで、契約書を出して見せる、と言ひ出しはしないかと自分は一方でハラ／＼してゐた。しかし父はそれきりなんにも言ひ出さなかつた。

さういふ父を見てゐると、父はこのやうな自分の態度から、兄や自分が考へてゐる正體をすつかり見抜いてしまつて、たゞ安心させる方便に過ぎない契約書など見たくないといふ肚なのかも知れないと思はれて來た。家を亡くすなといふことを今は一つの願ひのやうにして言つてゐる口ぶりから察しても、確かにさうなのだと思はれて來た。今迄の父ならこゝで再び、自分達の考へに鞭打つやうにして説法したかも知れないのだが、今はその元氣も全く衰へ果てゐる。

自分は、まともには見てゐられないほど父が痛々しくなりながら、最早何を言つても父の耳に

は空々しく聞えるだらうと思はれ、いよ／＼なんにも言へなくなつた。父から見れば誰もこの家を守らうとしない事實、自分達からいへば守りたくも守れさうもない現實を前に置いて、父と自分はいつまでも黙つて見つめ合つてゐるより外はなかつたのである。

それから五日目の夕方、父はつひにその事には觸れずに死んで行つた。

四

三年して、最後まで残つてゐた末弟の實が中學を出ると、すぐ上京してしまつた。その後には前に言つた村の一家族が入つて百姓をはじめた。家屋敷や田畑を賣り拂ふことはしなかつたが、家を守るものなくなつたことはこゝに事實となつたのである。

さうなつて見ると自分達は、うしろの風よけを急に取り拂はれたやうな空ろな肌寒さを感じた。今までは、たゞ荷厄介に思つてゐたあの小さな家も、實は自分達のこゝろを相應に暖めてくれたことが解つた。といつて今になつてそんなことを言つても仕方がなかつた。今はあの家へ歸つても、ごめん下さいと腰をかゞめて入らねばならなくなつたのである。いきほひ、誰も歸らなくなつてしまつた。

その年から數へればこの春で丁度十四年になる。その間に自分達兄弟は、長兄から順繰りに弟の面倒を見るやうにして、どうやらそれ／＼の専門學校を濟まし、自分を除いては分相應の月給取りともなり、そして妻を迎へ、末弟の實ですらも二人の子の父親となつた。そして長兄は五十を越した。

自分達はそろ／＼、それ／＼の殺の中で一應の安定は得てゐながら、それも高が知れたものであることが解つて來た。考へるとかうしてぼんやりしてゐられないやうな不安にも襲はれた。一面それは所謂インテリゲンチヤ共通の漠然としたものであるが、それ以上もつとはるかに偉大なものが、登足高くあらゆる人々の身邊へ迫りつゝあるのを、自分達もはつきりと感じはじめたからである。そしてそれは一つの例外も許さない實に冷たくも厳しい運命とも感じられて來たからである。

自分達はいつか故郷の家を思ふやうになつてゐた。父の言葉はこのやうな時代の到來を見越してのものではなかつたに違ひないが、ともかく自分達の心は、この頃になつて頻りと故郷の家へ一つの安息所を求めはじめたのである。

いふまでもなくこの考へは非常に消極的なもので、自分達だけこつそりとその大きな登音から

遠のき、厳しい運命から逃れて、故郷の家の庭隅の陽だまりに日向ぼっこをしてゐようとするやうなものであつた。そしてさういふ考への中にのみ没頭してゐると、今その故郷の家を守つてゐるものがなくなつてゐることがしみじみ淋しくなり、こゝで改めて父の言葉を思ひ起して内心苦笑せずにはゐられなかつた。

然しこんな考への中にいつまで没頭してゐられるものでないことはまた言ふまでもなかつた。自分はこゝで「方丈記」の筆者が、浮世の波風を山奥に避けて、ひとり安心立命したやうに書いてゐながら、あれもよく見れば嘘で、實は心中恒にさわくゝと騒がしく動揺してゐたもののやうにかゞはれることなどを思ひ出し、八百年の昔ですらさうではないか、と自分へ言つて見てまた佻しく苦笑せずにはゐられなかつた。よし故郷の家が兄弟の誰かの手で現在まで守られてゐたとしても、そこはそこで骨を刺す寒風の吹きすさんでゐるさまがまざくゝと目に見えて來るのである。

結局自分達は、父の言つた意味とはまるで異つた性質で、かへるべき所を失つてしまつた気持ちになつたのであつた。このはじめに、父の意志に反いてゐると知りながら今尙ほ誰もこの家へ歸らうとするものがない、といふやうなことを言つたのはこの意味からであつた。

五

さて去年の十二月のこと、自分はある機會を得て、岩手、青森、秋田の農村、漁村を見て歩いた。これらの地方は、昭和六年と九年の冷害大凶作の場合も自分は見歩いた経験があるので、その時と較べたら今年などは事新らしく心打たれるやうなものにぶつかることもあるまいと考へながら出かけて行つた。また實際歩いて見てその通りであつたのだが、しかも自分は前の二度の経験などには覺えなかつた深い疲労を感じたのである。それは東北の深い雪を兩肩へどつしりと背負つて來てゐるやうな何とも身動きのならない重く冷い疲労であつた。そのために自分は可なり腹立たしくさへなつてゐた。

自分は歸京の汽車の中でさういふ自分を持ってあましながら、何がこんなに疲労させ腹立たしくさせてゐるかを考へた。理由は幾つも考へられた。自分から土の中へ頭を突つ込んでしまつてゐるやうな農民達自體に對する齒痒さ、それを取り巻くいろいろな組織機構へ向つての憤慨、また、それらをそのまま引つくるめてがんにがらめにしてしまつてゐる一大壓力に對する嘆息等々。だが、それらだけではまだ納得できない理由が残つてゐるやうに感じられたが、それが何であるか

自分にはどうしても思ひつかかなかつた。自分は狭苦しい三等寢臺車の寢床の中で、溜息をついては寝返りばかり打つてゐた。

東北の雪の夜を走りつゞけた汽車は、明け方關東へ入りそして自分の故郷の村へ近づいた。自分分はこれ迄も汽車でこゝを通る時は、一つの挨拶をするやうな積りで村の方へ顔を向けることを忘れなかつたが、その朝も寢臺から下りて窓の硝子越しに視線を遠くやつた。村をつゝむ一かたまりの杉森は、霜枯れた雑木林の彼方に稍々淺黄色にかすんで見えた。父のゐた頃からすれば、それは巾狭くなり間もすけていかにも寒さうになつてゐる。が、とにかく故郷の面影はまだあゝして残つてゐるな、とこんな風に感じた時である。ふつと胸へ浮んだ一つの感情が、昨夜から思ひつかずにゐた一つの理由を思ひ當らせたやうな氣がした。——あゝ、あの故郷だつた。と思はず自分は自分へ言つたのである。

さう言つて見ると、自分は、今度の東北の旅の中で、たゞ農村漁村の現實を見て齒痒さを感じ憤慨し嘆息した以上に、自分自身の故郷をどことはなしに探し歩いてゐたのだと解つた。歸るべき故郷を失つてゐる自分は、知らず／＼の間に一つの新しい故郷に行く先々に求め歩いてゐたのだと解つた。事實自分は、ある山裾に深々と雪にくるまつた小さな部落を見ては、かくても人は棲めるものかとそこを自分の故郷にたとへて見、吹雪の渦巻く荒磯に牡蠣殻のやうにへばりついてゐるさゝやから漁村を見ては、ここにも人は生きて行けるのかとそこを自分の故郷として考へて見たのであつた。

それは實に怪しい孤獨の心だつた。それをやうやく支へるやうにして歩いてゐるうちに自分はこんな疲勞しそして腹立たしくなつたのであらう、と思ふと、正にさうなのだといふ氣持がごとくと腹の底へ落ち込むやうに感じられたのである。消極的な逃避心から故郷へ歸らうとする心を、この浮世の厳しい現實を思ふことで否定し、かへるべき故郷は何處にもないものとしてしまつてゐながら、また今度の東北の旅でもこの眼ではその通りであることを至る所で見えて來るながら、尙ほ且つ心の底ではその故郷を探し求めてゐる無意識の本能ともいふべきものを、かうして改めて感じて見ると、自分は今更らに父の言葉を思ひ起し、最早苦笑するどころではなくなつた。自分は、麥畑の向うへ遠のきつゝある故郷の杉森へ黙禮するやうにして眼を伏せ、寢臺の上へ匍ひ上つたのであつた。

歸京して見ると東京には年の暮が迫つてゐた。自分はしなければならぬ仕事を幾つか持つてゐたが、まるで手につかず徒らにいら／＼と年一杯を暮してしまつた。正月早々は、昨夏の大水害

を受けた自分の國の農村を、見て歩く豫定にしてゐながら、それにも取りかゝる氣力がすつかりなくなつてゐた。疲労と腹立しさが依然として、といふより日が経つにつれて身體中を押しつゝんで來、その中で、はげ口を失つてゐる例の無意識の本能ともいふべきものがそのまゝ重く黒ずんで來て、自分の心氣をいよゝゝ腐らすのである。自分はいつになく肩が凝り、抜衣紋に首を突出して呻るやうにしながら少しばかり仕事をしたが、そのうち半病人のやうになつてしまつた。自分はさういふ自分がまた腹立たしくなつた。こんなことをしてゐても仕方がないぢやないかといふ一種の反撥心が湧いて來た。で正月も十日程するうち、自分は豫定通り國の水害地を見ようとし、更らに故郷の村と家とを見て來ようといふ氣になつた。結果はどうならうとも、この自分を今こゝに改めて故郷の土の上へ立たして見ようと考へたのである。

しかしさう考へる心の裏には、永い間離反してゐた肉親の者へ「和睦」を申し込むやうな氣持ちが動いてゐた。そちらの言ひ分にも顔をそむけるやうなことはしないから、こつちの望みもきいてもらひたいといふ、自分としては謙虚な氣持ちが動いてゐた。と言つて、もしこの和睦が成立したら、自分は自分の生活を故郷の土へ移さうとまでは考へなかつた。もちろん、今は無くなつてゐる風よけを新たに造つて、そこに浮世の波風を避け、その陽だまりに自分ひとり日向ぼつ

こをしようとする氣分などは全く起らなかつた。いはば、どうしても離反してはゐられない故郷の土へ今改めてこの心をかへしたい、故郷の現實はさういふ自分を受入れるほどのものになつてゐてほしい、といふ氣持ちであり、そこには自分自身の問題でありながら何かそこから抜け出たものがあり、さういふ希望を抱く多くの人々に共通するものがあるやうにも感じられるものであつた。

さうは言ふものの、このやうな自分を再び立ち上らせるためにはいろんな意味で可なり努力が必要だつた。自分は齒を喰ひしばつて立ち上るやうにして、正月の半ば、もう一度上野驛を發つた。

六

故郷へは最後に行くことにして、先づ宇義通り一粒の米も取れなかつたといふ最もひどい水害を受けた利根下流の村へ行つた。

見渡す何里といふ水田は稻株一つ残さず、一面涸上つた泥沼のやうになり、その上を氷雨が横なぐりに降つてゐる。あらゆる生物をこの地方から絶滅させようとした昨夏の自然の暴力を自分

は胸の中に想ひ浮べながらこの光景を見ると、これもまたすべての生物を拂ひ除けようとしてゐるものやうに見え、そこからさまざまの聯想が浮び、自分は、すさまじい心でこれを打ち眺めた。傘を持たなかつた自分は、氷雨にも頭から打たれるまゝであつたが、構はずぐんぐん歩いて役場、産業組合、小學校、農家などを訪ね廻つた。

夕方、利根の土手の上にある村の宿へ急いでゐると、氷雨はいよいよ烈しくなつた。自分は土手の下に一つの小さな合掌小屋を見つけてそこへ走り込んだ。するとそこには十人ばかりの村人達が、蓑や合羽を着たまゝ僅かの焚火を圍んでうづくまつてゐた。役場で聞いた縣の救済事業の一つである利根の堤防工事へ出てゐる人達であつたのだ。八人までは女で、中には十四五の小娘も二三人ゐた。村の男達の大部分が東京方面の所謂殷賑工場へ出稼ぎしてゐる一方、居残つてゐる女達はかういふ仕事へ出て働いてゐるのである。ひゞとおかまと戰たたかだらけの手は寒さで眞赤になり、頬や唇は紫色になつてゐる。そしてみんな土塊のやうに圓まつて土塊つちかのやうに押し黙つてゐる。自分は聲をかけてその仲間へ入れてもらつたが、しばらくするうち息苦しくなつた。氷雨に吹きまわられてゐる水田の光景といひ、この人々の有様といひ、考へて見れば先月の東北の旅の至る所で見せられた姿以上ではなかつたのだが、その場分には感じられなかつたものが事新しく

胸を打つのである。自分は上野を發つ時の自分の心構へに何かまだ不足してゐるものがあつたやうに思はれた。ぼやく／＼して歩いたら、折角思ひ立つた故郷との「和睦」が、故郷の土を踏む前に崩れてしまひさうな氣さへした。

翌日はよく晴れたがその代り骨を刺すやうな北風が吹きすさんでゐた。自分は田圃の中道を歩きながら幾度か吹き倒されさうになり、頭の中も腹の中も寒風に吹き抜かれてすか／＼にされてしまつたやうになつた。その夕方辿りついた村は、自分の故郷から三里ばかりの所で、バスを利用すれば一時間足らずで行けるのを、自分はまつすぐ村の商人宿へ着いてしまつた。自分の故郷は、この地方ほどの水害は受けなかつたと聞いてゐるので、その點では昨日利根の土手で見たやうな光景にぶつかることはあるまいと思はれたが、しかしまたどんな光景を見ないとも限らないと、先づ今夜は宿でゆつくり寝て、新しい氣力を取り戻さうとしたのであつた。

ところが風は夜になつても止まず、軒の傾いた小さなその商人宿の二階は他愛なくぐら／＼とゆすぶられ、屋根のトタンは引き剥がされさうにバタ／＼と鳴りひゞき、氷のやうな風はどこからでも吹き込み、たうとう自分は明け方まで眠りつくことが出来なかつた。

次の日は風もしづまり穏やかな日和となつた。が、こんな寝不足な眼で故郷を見ることはいよ

いよ警戒しなければならぬと、自分は朝食後また二時間ばかり眠り、それから漫然とその近くの村を見歩いたり、掛茶屋で休んだり、丘裾の陽だまりに煙草をふかしながら寝ころんだりして、少しばかり元氣を取り戻し、午後三時近くやうやく故郷へのバスへ乗つたのである。

バスは、縣道ではあるが可なりのぬかるみと凹凸道をよろけながら跳ね上りながら四十分あまり走つて、故郷の村が四五町向うに見える所まで来た。自分はそこでバスを降りた。自分はそこからゆつくり歩いて、もう一度度胸を据ゑ直さうとしたのである。一昨日から腹の底にちよかんである例の和睦を改めて引き立てようとしたのである。

東北からの歸途、汽車の窓から見た杉森も見えて来た。沈みかけた夕陽がその森の頂をほんのり赤く染めてゐる。それは故郷を去つてからよく眼に浮ぶ故郷のなつかしい情景で、少年の日を思ひ出させるものであつた。それを仰ぎながら桑畑の中道を歩いて行くうち、自分の心は少し落ちつき和んで来た。

自分は、このあたりに父が残した麥畑があるはずだと思ひ、あたりを見廻した。それとはつきりは解らなかつたが、大體の見當はついた。夜毎の霜でまだ伸び出せず、僅かの青みを黒い土の中からのぞかせてゐる麥畑を、自分はしみくと見た。故郷を去るまでは自分もその畑で働いた

のである。母が麥蒔きに来て倒れたのもその畑ではなかつたか。

父の家を守るものがなくなつてから自分達兄弟は誰も歸らなくなつた、と前に言つたが、それからの十四年の間には、村の親戚の葬式などのために自分達は三四度歸つてはゐたのである。けれどそれはただ義理を足すだけの歸省で、自分達の家はもちろん、村の中を見て歩いたこともなかつた。自分達はさういふ機会にも「故郷を見る眼」を強ひて塞いでゐたのである。すればかうしてしみくと故郷の土を見たのは、十七年前の父の死の前最後のところが最後ではなかつたかと思つた。

村の中へ足を踏み入れた時は日も落ち、森に蔽はれた往還は薄暗くなつてゐた。が、それは村をよく見るには反つて好都合だと思つた。村人に顔を知られる心配もなくなるし、このしみくとした氣持ちを持ちつゞけるにも具合がいゝと思つたからである。自分は父の家は一番あとに見ることにして、先づ村の家の一軒々々を丹念に見ようとした。

七

村には三つの往還があり、一番南側がバスの通る縣道で、それと併行して他の二つが通つてゐる。

る。自分は縣道の方から歩き出した。自分は通りすがりの旅人のやうに、なるべく自然に歩かうとしながら、何かごちなく不自然になつて困つた。

釣瓶で水を汲む音がする。赤ん坊の泣き聲がする。藁を打つ音がする。既の匂ひや堆肥の匂ひがする。そんなことを感じただけで自分はいつか村をつき抜けてしまつた。自分は耳と鼻に感ずるものだけを感じて、眼では何にも見ずに通つてしまつたのである。

村はづれへ出て自分はホツとした。不思議な氣持ちだつた。自分は竹藪のかけにイんで煙草に火をつけながら、こんなことぢや仕様がなと思ひ直し、再び中の往還を引き返しはじめた。こんどは出来るだけ眼を使はうとした。さうして見ると納屋があつたはずの所が桑畑になつてゐたり、藪のところが野菜畑になつてゐたり、もつときちんと並んでゐたと思つた生垣や竹垣ががさがさに崩れ歪んでゐたり、子供の頃よく木登りをし、秋になるとその實を喰ふのが楽しみだつた大きな椋の樹が並んでゐたところには、五六尺の杉がひよろ／＼と立ち並んでゐたりした。だがそれ以上に一軒々々の家の容子を見ることはやつぱり出来ず、再び村を抜けてしまつた。

自分はまた桐畑の端にイんで煙草をすひ出した。今通つて来た往還の寒さが後から追つかけて来るやうな氣がした。自分はそれまでに四人程の村人に出會つてゐた。門先で遊んでゐる子供等

は七八人見てゐた。子供等は自分がこの村を去つてから生れたものばかりで、自分を知るはずもなかつたが、四人の村人も自分の顔に氣づいたものはなかつた。ところでさつきの自分はさうあつたことを希望しそれを好都合としてゐたのに、どうしたことか今はそれがひどく物足らなく寂しく感じて来た。

自分はちよつと名狀しやうのない氣持ちで、桐畑の端を往つたり來たりしてゐた。さうしてゐると、村全體から言ひやうもなく底冷たいものがしん／＼と迫つて来るやうな氣がした。すくなくも自分が少年の頃には、夕方ともなればどことなく和やかな暖かい空氣が村全體にこもり、そして柔らかな奥深い村の聲が村はづれまで傳つて來てゐた。だが、今こゝへ迫つて來る寒さと静けさ。父の家が一番北側の往還の中ほどにあつたが、自分はそれを見に行く勇氣がなくなりかけた。村の中もこれ以上見ない方がいゝといふ氣になり、何か放心したやうな氣持ちで眼をあげると、西の空に、七八日ごろの月が目にしみるほどの青さで光つてゐた。自分はぞつとして外套の襟を立て首を縮めて、元の縣道の方へぼつ／＼歸りかけた。

このまゝ歸つてしまつたら、例の故郷との「和睦」は永久に不成立に終るだらうと自分は思つた。そこで故郷を求め心は再び宙に迷ひ出すだらう、そこへ東北の旅から背負つて來た重い疲

勞がおつかぶさつて、この方面への自分の心は更に一段と暗いあきらめの世界へ入つて行くことだらうと自分は思つた。それも今更に自分の胸を痛めるものではなかつたが、しかしかういふ場合にさういふことを思ふその思ひには、實に身にしみ渡るほどの苦さがあつた。

桐畑の所を過ぎて、茶の木が並んでゐる傍をいくと、また一人の村人が月の光の中にくつきりと黒く歩いて來た。この時自分はふと、その村人にも顔を知られずに行き過ぎられては堪らない氣がした。それは先刻から湧いてゐた感情ではあつたが、さう氣づいて見ると自分はこのまゝここを立ち去らうとして歩いてゐながら、それきりでは去り切れないものが自分をうしろへ引き戻してゐるのを今ははつきりと感じた。自分はさつき村を歩き抜けた時に感じたあのホツとした氣持ちはまるで反對のホツとしたところで立ち止り、先方が近づくの待つた。そして親しみをこめた聲で、今晚はと聲をかけた。先方は圓く着ぶくれたねんねこの中から、龜の子のやうに首をつき出してこつちを凝視した。見るとそれは小學校時代自分より一年下の男だつた。が、その友はまだこつちの顔を思ひ出せずにあるので、自分は改めて名のつて久しぶりの言葉を言つた。友はやつと解つたといふ顔をした。

友は片手にぶら下げてゐる硝子壺を地べたへ置いて、茶の木の横へしやがんだ。しやがんで話

すといふことが親しみを現す村人の一つの形なのである。自分もしやがんだ。小學校時代から數へれば三十年、自分が村を去つから二十五年、その年月を二人は言ひ合つて、久しぶりの言葉をもう一度繰り返して見たが、話題はそれにつれて昔へかへりはしなかつた。あまりに遠い永い過去は、たゞ漠として取つつき端もなかつたのである。自分は現在の村のこゝろを持ち出し、

「村の様子も大分變つたらうな」といふ風に言つて見た。

「相變らずでさ」と友はそれには何の興味もないといふ口調で答へた。

「でも少しは良くなつてゐるだらうな」

自分はそれをお座なりに訊くのではないといふこゝろを見せて、重ねて言つて見た。するとその友は、

「なアに、かへつて悪くなつてまさ」と吐き出すやうに答へた。そして、わしら小學校の頃から見ると、家の數は三軒ばかりふえてゐるが、その代り身代限りをした家が二軒あり、また今つぶれかけてゐる家が四五軒もある始末だからな、とつけ加へたのである。

「するとやつぱり去年の水害なども相當祟つてゐるわけだね」

「そりやなに大した痛手ぢやなかつたでさ」

それからぼそ／＼と話すのを聞くと、この邊の百姓達は、たゞもう何といふわけなしに年々悪くなつて来る。昔あつた米倉もなくなる家ばかりで、納屋でも腐れるまゝにしてゐる家が多く、馬などは昔はこの家にも一頭はゐたが、今は五軒に一頭ぐらゐになつてしまつた。電燈も引いてゐながら大ていは消されちまつて、また昔のランプをとぼしてゐるやうな有様で、わしも今その石油をちつとばかり買つて来たところだ、といふのであつた。

その友の足元に置いてある二合入と思はれる硝子燭を、自分はこの男の晩酌のための地酒だと思つてゐたのだが、それは石油であつたのだ。この四十男が日も暮れてからそれほどの石油を買つて来るといふのは、何とも佗しい話で、自分はそれ以上話をすゝめて行けなくなつた。

自分は地面へ向つて密かに深い溜息をもらした。すべては十七年前、父から家督相續の件を持ち出された時に、兄と話し合つた通りになつてゐたのである。東北の旅と、一昨日から歩いてゐる水害地とで、いやといふほど見て来た姿を、やつぱりこゝにもはつきりと見たのである。自分はこゝでどたりと地べたへ坐つてしまひさうな暗い重さを全身に感じた。そして、故郷との「和睦」などは跡方もなく消え失せてしまふのではないかと感じた。

自分は二本の煙草を取り出し、一本を友の手に持たせてマツチをすつた。そのほの明るい中に

二人の顔は近々と浮んだ。二人は一つの火を吸ひ合つた。さうしてしばらく黙つて煙草を吸つてゐるうちに、何かかう惻々たるものが友の胸からこつちの胸へじんわりと流れて来るのを自分は感じた。

自分はそれを不思議なものやうに味つてゐた。そのうち胸の中が少しばかり暖くうるほつて来るのを感じて来た。今までののはたゞどつしりと石のやうに重く、また怪物の影のやうに暗く襲ひかゝつてゐる感じであつたが、今は微かながら熱い血が通つて、からだの隅々へしみ込んで行くやうに感じて来たのである。

思ふにこれは、さつき村を立ち去らうとして立ち去り難いものを感じた時から胸の奥へ湧き出してゐたものであつたらう。とにかくそれは何か不思議な本能的な感情で、自分にもまつたく思ひがけないことであつた。

間もなく自分はその友と肩を並べて友のかへる方へ歩き出した。父の家を見るつもりになつたのだ。村の様子がさうして解つた上は、改めて父の家を見るまでもないといふ氣持ちで見ようといふつもりになつたのだ。友は歩きながら、こんな寒い夜に何用で歸つたのかと、それをはじめからげんに思つてゐたやうに尋ねた。自分は、別段の用事はなく旅行に出た序でに親爺達の墓

まわりをしたり、親戚へ立ち寄つて見ようと思つたりしてと答へると、友はそれ以上は尋ねず、わしの家へも寄つてもらひたいが、坐るところもなくと、たゞそれを氣の毒さうに言つた。

父の家はその友の家から一町ほど奥にあつた。自分は友の家の門口で友と別れた。やがて父の家の門先へ来た。生垣はまばらにうら枯れて、眞竹が、その上からばさりと往還へ垂れ下つてゐる。その下をくゞるやうにして庭へ入つて行くと、父の家はひっそりとなつてゐた。雨戸の隙間からはうす黄いろい灯がもれてゐたが、家の中もひっそりかんとしてゐる。自分は、今その中に棲んでゐる一家族の顔を思ひ出さうとして見たが、どの顔もはつきりとは思ひ出せなかつた。

自分は庭の隅へ立つて、まだらに月影を受けてゐるこの家をつく／＼と見た。それは豫想以上に荒れ果てゝゐた。屋根棟は兩肩をくたりと落し、藁屋根は一面に乾いた苔に蔽はれ、軒の庇はもうやり切れぬといふやうにだらりとのめり、そしてどこもかも枯れ萎び歪み果てゝゐる。昔の面影などどこにも残つてゐなかつた。

覺悟をして來た自分は、今さらの感傷もおどろきも感じなかつた。が、何かもつと胸の奥の方からづき／＼とうづいて來るのを感じた。そのうち自分はふつとこの家の姿から、父の死の前の顔を聯想した。とたまらなく痛々しい思ひがぐら／＼と胸元からこみ上げ來て、自分はこの家が

可哀さうで可哀さうでなくなつた。

その夜自分は、村端れの墓地へ行き、父と母の墓前に頭を下げると、何處へも立ち寄らず、村から二里ほど北の町の宿へ向つて、すでに霜が眞白に降りた道を踏んで行つた。

自分は呆然とした気持ちで歩いてゐた。その一方では、胸の奥から、うづき出したものがだんだんとからだ中へひろがるのを感じた。するうちに自分は、例の故郷との「和睦」がいつの間にか成立して、自分の心はすっかり故郷の土にかへつてゐる自分を感じてゐた。しかもその和睦ははじめに期待した自分の立場——故郷の現實がかうして「故郷を求め」自分の心を何とか受け容れる程度のものになつてゐてほしいといふ立場からではなく、その意味では全くの無條件で、故郷のありのままの現實に、身ぐるみ引き入れられての和睦であるのを感じた。それゆゑ、それは、そこが自分の故郷の地にふさはしからうとなからうと——靈魂を休める所であらうとなからうと、そこに降りかゝる氷雨にも吹き寄せる寒風にも、身をさらして最後まで自分を立ちつくさせようとするものやうに感じられた。そしてそれはまた實におそろしくも嚴しいものに感じられた。

彷徨

これこそは自分が曾て豫期してゐたのとは全然正反對の境地だつた。自分はこれをそつと反芻しながら、月も落ちた枯野の中の道を歩いて行つた。——何か鹽辛いものが喉のうちから湧いて来て仕方がなかつた。

—完—

昭和十五年四月十五日印刷
昭和十五年四月二十日發行

檢印

「彷徨」	
定價 二 圓	
(外地は二割増)	
著者	下村千秋
發行者	東京市麴町區麴町一丁目三番地 牧野武夫
印刷者	東京市麴町區有樂町一丁目十三番地 日永悌三
印刷所	東京市麴町區有樂町一丁目十三番地 株式會社有恒社
發行所	東京市麴町區麴町一丁目三番地 牧野書店
	振替・東京四〇一八番 電話・九段三六六八番

好評の牧野書店新刊書

百姓記

吉田十四雄著

土の文學であり、百姓體驗記であつて而かも誰が讀んでも面白い。百姓が書いた素朴な小説であるが作家の及ばぬ味がある。日を追うて好評。(定價二圓)

有輪擔架

吉田璋也著

多くの戰爭文學の中にあつて特異の觀察と體驗を持つ軍醫の從軍日記、意味あふれ支那及び支那民衆の眞相をつぶさに語る。箱入美本!(定價二圓半)

歐洲史

ラヴィス原著
廣瀬哲士譯

博大な學殖と深長な思想をバックとしてまとめられた得がたい歐洲史、現歐洲の政情もその史的展開を知らずしては理解しがたし。(定價二圓)

わが戰場

ドオテエ原著
堀田周一譯

一流文學者で而も一流政治家たる著者の生活體驗を巴里の描寫に織り込んだ回想記、日本の文學者は何をしてゐるかと思はせる問題篇。(定價二圓廿錢)

閑話休題

宇野浩二著

作家生活三十年、文學の蟲と云はれる著者の文藝隨筆を集めた天下の珍什、文藝愛好家の見のがせぬ名隨筆集。(定價二圓)

愛と死と

廣津和郎著

人生の深刻相に直面せる著者が身を以て書き綴れる名篇に添ふるに、宇野氏が志賀直哉に匹敵すると稱讃せる珠玉の小品を以てす。(定價二圓近日發行)

微笑亭夜話

式場隆三郎著

工藝美術品としての粹を極めた獨特の豪華本を御期待下さい。定價券定二十圓(百部限定)紙装ではあるが特製の普及版は二圓五十錢(近日出來、乞御豫約)

903
109

8/18

終



牧野書店

¥ 2.00